

---

黒き刃は妖精と共に  
空月八代

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒き刃は妖精と共に

### 【作者名】

空月八代

### 【あらすじ】

滅竜魔導師。それは、竜を倒す力を持った魔法やそれを扱う人間の呼称である。だが、ドラゴンの存在自体がファンタジーとされているこの世界で、その存在はあまりにも希薄なものだった。幼き日に、自分に魔法と知識を与えてくれた、そしてある日突然いなくなってしまう「天竜グランディーネ」を探し続ける少女、ウエンディ・マーベル。依頼のさなか、凶悪なモンスターに襲われ殺される寸前だった彼女を救ったのは、彼女と同じ滅竜魔導師の青年だった。（この作品は数年前に他のサイトで投稿していた同じ題名の作品を書

き直したものです。覚えのある文章が出てくるかもしれませんが、同一人物の作品なのでとくに気にしないでください)

——その場所は、酷く廃れた大地だった。

本来ならば青々とした美しい草花が覆い尽くしていたはずの大地は、今は全ての植物が死を迎え、亀裂の入った大地から突き出すのは赤い脈動を繰り返す溶岩石、大地を覆うのは遙か彼方で爆発を繰り返す火山の灰。世界を浄化するわずかな植物が死に絶えたこの場所の空気は淀みきっている。

大地を侵す真紅の死神は徐々に荒野にまで迫っていて、あと半時間も経たぬ内にすべてが焼き付くされ、後に形作られる新たな大地の下地となってしまうのは明らかである。そこに生き物が抵抗するすべはなく、できることと言えば逃げることに他ならない。

少し前までそこは、平和だった、緑溢れる場所だった。

この場所が地獄と化した原因。

それらは今、荒れ果てた大地を離れ戦場を空に移していた。

竜だった。

黒い、黒い、二体の巨大な竜だ。

黒い、という共通点はあるもののその二体の竜は全く違う容姿をもっていた。

一体は、禍々しい魔力をまとう異形。

一体は、全身の至る部分が刃物のようにになっている。

彼らが闘争を始め、すでに長い時間が経過している。ほぼ無限に近い体力をもつ竜という存在、しかし相手も同じ竜である以上その優位性は意味をなさない。両者の体には、その強固な鱗と体毛をものともしない互いの力につけられた痛々しい傷がところせましと刻

まれている。

とはいえ、ドッペルケンガーでもない二体、実力の差か、消耗が激しいのは刃を身に宿す竜の方らしい。真紅の瞳は疲労と、それ以上の怒りに満ちている。それは、力なき自分に対してか、相手の非道な行いに対してか。

刃の竜は、怠惰な竜だった。

森羅万象の一切興味をもたない、永遠に近い命を持ちながら知識も力も求めず、全てを面倒だと、全てを下らないと一蹴し傍観を貫いていた。

なにもせず、なにも見ず、なにも考えない。

無意味で怠惰な毎日。

そんな彼がようやく見つけた、大切なもの。

どうしてもよかった生に意味を与えたくれた、大切なもの。

それを、かの竜が、禍々しい魔力をまとう竜が壊さんとしている。己の私利私欲のためだけに、自分の大切なものを破壊しようとしている。

それは、絶対に許されないことだ。

刃の竜の足元に、波紋が浮かぶ。まるで、そこが水面であるかのように空間が波打つ。大気が魔力に感化され、眼科の地獄がよりいっそう勢いを増す。

牙を剥いて。

全身の刃を逆立てて。

刃の竜は、異形の竜へとびかかった。

その勢いはすさまじく、とてもではないが空を飛んでいる巨体の動きではなかった。そう、まるで「空中を蹴っている」かのような急加速。

例外なく見上げるような巨体をもつ竜が、欠き消えるような勢い

で移動する。脆弱な地上の生物が相手ならば、これはこの上ない恐怖だろうが、生憎相対しているのは同じ竜。

巨大な、しかし先端はどんな刃物よりも鋭い竜の翼。すでに山を三つ一刀のもとに両断しているそれを、異形の竜は身にまとう魔力であっさり受け止めてしまった。

二体の竜の戦闘スタイルには大きな違いがあった。

異形の竜は四足と二対の翼を持ち、その膨大な魔力で遠距離からの放射系の攻撃を得意としていた。

対し、刃の竜はコウモリのように前足と翼が一体化していて、その両手の翼刃を用いたゼロ距離戦闘こそを最大の戦力としていた。もちろん竜である以上ブレスなどの遠距離攻撃を行使することは可能だったが、専門性が違う。

動きの止まった刃の竜、時間にしてみれば刹那であったが竜の争いにその刹那はあまりにも長すぎた。

魔力が蛇のように変化し、翼ごと刃の竜の腕をへし折った。

今まで何度も鋼をも凌駕する刃の竜を傷つけてきた魔力の蛇。刃物以上に刃物らしい刃の竜の翼ごと締め付けていながら、切断されるどころか傷ひとつつかないそれは、両者の魔力の差をみせつけているかのようで。

しかし。

悲鳴は、ない。

体を、前へ。

ゼロ距離。

長い拮抗と、己の優位を確信した異形の竜の油断がようやく招いた、最良の間合い。

異形の竜が焦ったように魔力の蛇で刃の竜を引き剥がそうとするが、折れたはずの腕が鱗を掴みそれを許さない。

一閃。

山を中腹から両断する刃が、異形の竜をとらえた。

波紋が浮かぶ空中を蹴り、後退した刃の竜の眼下。異形の竜が恨めしげな声をあげながら、高高度からマグマの這う大地に叩きつけられた。

咆哮。

二度と近づくなという、怒気と殺意を溢れんばかりにはらんだ大絶叫が刃の竜から放たれる。

しかし、異形の竜は依然としてその態度を改めない。

知っているのだ、刃の竜がもう限界であることを。自身とて限界は近いが、蛇によってもたらされるのはなにも外傷だけではない。

あと一回、蛇が触れれば刃の竜蝕む毒はその抵抗力を上回る。

最後の激突。

異形の竜の勝利で終わろうとしていた闘争に。

それは、介入した。

「—————！」

反応は、異形の竜が早かった。

生物が立ち入れないまでに荒れた大地にポツリ、紅い少女が立っていた。

まだ親に手を引かれていてもおかしくない、幼い人間の少女。

場に似つかわしくない以前に、まず屈強な戦士であっても生命活動に支障をきたすこの地に、薄い紅のワンピースと同じ色のケープのみでなんら不自由なく存在している点ではある意味竜よりも異様な少女。

そんな少女が、己の目に迫る危機すら無視して叫ぶのは刃の竜の



けじゃないか。

「ふふ、あなたが……それを云うの？」

苦しいだろう、辛いだろう。

それでも、少女は刃の竜に笑顔を向ける。

「あなたを助けられた、それで十分」

刃の竜は、答えない。

「この命を、あなたのために使えたんだもん。満足だよ」

竜は、泣いていた。

その先に行く言葉が、わかってしまったから。

「だから、ね。……最期は、あなたの手で……」

竜は、少女の言葉に静かに答えた。

そこは、知的生命体の手によってもたらされるの穢れを知らない美しい場所だった。人工的な音がない、強いて言えば風と鳥のさえずりのみが聞こえる緑豊かな樹海だ。

だが、今日に限っては平和な場所である、とはいえないようだった。

「きゃっ……！」

道なき道を駆ける無数の影。

ウォードッグと呼称されるその獣は、狼に似た比較的小型のモンスターである。小型のモンスターという伝聞ではあまり驚異に感じないかもしれないが、例によってこのモンスターは集団で狩りを行うのだ。

一見細く折れてしまいそうにも見える足は筋肉が極限まで最適化した結果であり、その脚力は並の馬をも凌駕する。爪先の鋭い爪は大木を垂直に走ることすら可能という。

そんなウォードッグに追いかけているのは、幼い少女だった。深い青色の腰まで伸びた髪に、右肩にはなにか生き物を模したようなタトゥーが描かれている。

「ウェンディ、大丈夫!？」

「う、うん。なんとか!」

少女の名前を呼んだのは、白い毛並みをした猫だった。

猫とは言うものの、どうやら少女――ウエンディの連れらしいその生物は、会話していること已然にその背中からは白い翼が生え、空を飛んでいる奇妙な生命体だった。

その猫――のような生き物――に急かされたウエンディは、躓き崩れた体制をなんとか正しウォードッグから逃げだそうと加速する。幼い少女が馬よりも早いモンスターから逃走する、それは当然不可能なことだが、なぜかウォードッグは未だに彼女へとたどり着いていない。

ウエンディの駆ける速度は、その可憐な容姿とはうってかわり異様なまでに速い。駆ける、というよりは翔ると表現した方がいいような、一歩一歩が長い走り方だ。軽い足音とは打って変わり、一歩が爆発的な加速を生んでいる。

彼女は人間である。しかし、そこに普通の、とはつかない。

――【魔導師】

魔力を行使することのできる、ごく限られた稀有な才能を持つ人間。才能の有無は生まれた瞬間に決定しており、無ければ年若い知識に溢れた者でも行使できず、あればこのように幼い少女でも人の常識を上回った力を使うことができる。

しかし、

「あっ……」

いかに魔力を行使できても、幼い体に長時間その力を使う体力は備えられていない。

疲労のせいだろう、ガクリと膝が曲がり崩れるようにウエンディ

が転倒する。

「ウエンディ！」

白猫が叫ぶが、足をひねったらしくウエンディは立ち上がれそうにはない。

ウォードッグは好戦的かつ肉食のモンスターである。襲われ、食  
い殺される人間は決して少なくない。

必死に反転しウエンディとウォードッグの空間に白猫が割り込む  
が、戦えないから逃げていた二人、それはどちらが先に食われるか  
の違いしか生まない。

死を目前に、ウエンディは目を閉じる。

襲いくるであろう痛みにも、死に、悲鳴をあげることすらできず、  
無意味に身を固める。

耳元に迫る、ウォードッグのうめき声。

が、突然そのなかに鈍い打撃音が混ざった。

痛みはない。なら、目をつぶる寸前に見えた自分とウォードッグ  
の間に割り込みかばってくれた白猫がその打撃を受けてしまったの  
では。

「シャルル！！」

見開く、瞳。

その目にうつったのは血まみれの白猫——シャルル、

「え………？」

ではなく、黒い打裂羽織をまとい、同色の笠をかぶった人影だった。

地面と水平に右へつき出された足、それはウェンディに襲いかかってきたウォードッグを蹴り飛ばしたらしく、直線上の木の根もとに不自然な姿勢のウォードッグがうなだれている。

仲間の欠損を悟ったのか、混乱するウェンディから黒い人影へと目標をかえたらしいウォードッグ続けて二匹、人影へと襲いかかる。引っ搔かれればただではすまない爪が、噛みつかれば骨まで噛み砕かれる牙が、同時に人影の命を狩ろうと迫る。

「……ははっ」

聞こえてきたのは、若い男性のものとされる笑い声。

どうやら戦闘技術を心得ているらしい人影は、なにを思ったのか迫りくるウォードッグのうち一匹……噛みつこうと大口を開けているほうのウォードッグ口へと右手を伸ばし、ためらいなく突っ込んだ。当然ウォードッグはその右手を噛み砕こうと牙をたてるが、人影はなに食わぬ様子でその顎を掴みもう一匹へと叩きつけた。

本来ウォードッグというモンスターは何十メートルもある段差をもともせず駆ける頑丈な体を持っていて多少の打撃では怯みもしないはずなのだが、人影の力は相当強くウォードッグは揃って地に落ちてしまった。

ものの数秒で三匹が戦闘不能に陥ったが、その程度で怯むウォードッグではない。

人影は噛ませた腕をすぐさまマントの中へと隠したが、わずかな時間とはいえ噛みついていたところを無理やり引き剥がしたようなもの、少なくとも負傷していることは確実。

五匹。

狭い木々の隙間を十全に走ることができギリギリの数のウォードッグが目にも止まらない速度で人影へと襲いかかる。

しかし、人影は引くどころか背を曲げ前へと飛び出した。

伸ばす、先程とは逆の腕。なにを考えているのか、再びウォードッグの強靱な顎へとその腕を突っ込もうとしているらしい。

顎を掴む寸前、ウォードッグが急停止。目標を掴み損なった人影がたたらを踏みながらなんとか転倒を免れる。人影の腕を破壊することより、仲間の消耗を回避することを優先させたのだ。

背後から、側面から、木々伝いに上から。腕に、足に、腰に、背に。鋭い牙が突き立てられていく。

腕の先、満足に遠心力を利用することができた先程とは訳が違う。五匹ものウォードッグに食らいつかれてはさすがにたまったものではないらしく人影が身をよじるが、その程度で顎を緩めるウォードッグではない。

そこ殺到する、控えていた残り十匹。

少女を助けんと現れた勇敢な人影が食い殺される、刹那。

「天を切り裂く剛腕なる力をー（アームズ）！」

回転。

突如としてさらなる剛力を発した人影が両腕を振り子に一回転。噛みついてきたウォードッグ達を四方の木々へ振り払い、目前に迫っていた一匹顔面を殴り付けた。

地を掴む音。

あと一步で噛み殺せたはずの人影の急変に、警戒深く距離をとったのはウォードッグ。

そんな彼らをよそに、人影は自信が発した剛力に驚いたかのよう  
に首をかしげ、続いて笠の下から背後の少女を振り返った。

「……！ ご、ごめんなさい……。私の魔法、です」

おどおどとした様子で答えたのは、座り込んだままシャルルを抱  
き抱えたウエンディだった。

謝ったのは、笠の下から覗く人影の姿が少々不気味だったからだ  
ろうか。それでも、魔力を灯し輝く小さな手のひらは人影へとしっ  
かり向けられている。

守っていたはずの少々から、突如自身のパラメーターを引き上げ  
るといふ珍しい援護に、戦闘中であることも忘れ人影は一瞬キョト  
ンと動きを止めていたが、

「……援護、感謝するよ」

眩き、視線を戻す。

すでに半数になったウォードッグだったが、その戦意は未だに健  
在。どうにか人影を排除し、背後の柔らかそうな少女の肉を貪れな  
いかと思索しているようだ。

手も足も、すべてマントの下に隠したたずむ人影。

その下は、満身創痍かもしれない。

援護を受けたとはいえ、事前にあれだけ噛みつかれたのだ。鎧で  
も着込んでいない限り無傷とはいかない。否、肉が骨に張り付くほ  
ど痩せていたとしても外套の下に着込める程度の鎧ではウォードッ  
グの牙は防げないのだが。

残九匹。

物量で押しきれると踏んだのだろう、ウォードッグは一斉に人影へと襲いかかった。

後には引けない、死力の特攻。いままで以上に加速のついたウォードッグたちは人影が反応する前にその喉元に到達した。

そして――

「……………」

響く、破裂音。

時間が止まったようにウォードッグらが空中で急停止。

次いで、鏗鳴り。

人影は一步も動いていないにも関わらず、キンッ、と刃物を鞘に納め音だけが響き、ウォードッグ達が駆けてきた方向とは真逆に吹き飛び、舞っていた木葉がバラバラに切り裂かれ、木々に浅い切り傷が刻まれた。

静まりかえる場。

辺りへの影響とは裏腹に、以外にもウォードッグたちはすぐさま起き上がった。体毛に隠れ皮膚には木々と同じく浅い切り傷が刻まれていたが、戦闘に支障をきたすほどではないだろう。

たたずむ人影に、しかしウォードッグたちは動かない。戦意すら失ったのか、唸り声は弱々しい鳴き声にかわっていた。

「行け。二度とこの地へ訪れないと言うなら、僕はもう君たちに興味はない。大人しく、自分の住みかへ帰れ」

ウォードッグは頭のいいモンスターである。

とはいえ人語を理解する高い知性は持ち合わせていないはずなの

だが、恨めしげに一鳴き。リーダー格らしい他よりいくぶん大柄な体を持った個体先導のもと、ウォードッグは静かに去っていった。

完全にその姿が消え、今度こそ森に静寂が訪れる。

ウォードッグを見送った姿　まま動かない人影に、ウエンディはようやく自分がこの男性に助けられたのだと落ち着いて確認することができた。

幼い彼女には、目の前で起こった出来事はあまりに衝撃的だったのだ。

死を覚悟しからものの数分間に、どこからか現れた人影がその驚異をあっさりと排除してしまった。最中思わず補助の魔法で手助けするにはしたが、どうもその後の展開を見るにそれも必須であったとは言えないだろう。

なにより、死の間際まで戦意を失わないはずのウォードッグにたいし不殺撃退などということやってのけたのだ。

だからこそ、ウエンディは未だに礼を言い出せないでいた。

結局最後まで笠と打裂羽織をはずさずにいたので容姿がはっきりせず声がかげづらいというのももちろんあるが、あまりにも自分の常識から外れた人物を前に恐怖しているというの最たる理由だろう。こういったとき率先して彼女の代理人として相手を詰問してくれるはずのシャルルも、さすが気が引けてか押し黙っている。

そうはいっても、いかに得たいの知れない人影であってもこのままさよならと去って行くわけもなし。

意を決し、礼をのべようとウエンディが口を開いたちようどそのとき。

「あいつらは頭がいい。一回自分達を脅かす存在がいるとわかった場所にはまず近づかないはずだ」

遮るように、人影がそんな発言をした。

先手をとられさらに言い出しづらくなったウェンディを知ってか知らずか、人影はこちらに振り向くと笠へと手を伸ばし、その紐をゆっくり解いた。

「君たち、怪我はない？」

笠の下から現れた黒髪の青年は、困ったような笑みをうかべウェンディへと手をさしのべた。

.....

「いたっ！」

「おおっと、悪い」

小さな泉の近くの切り株に腰かけたウェンディの訴えに、黒髪の青年が焦ったようにその手を離した。

戦場となった場所から歩くこと数分。件の出来事で小さな切り傷

やら足をくじいてしまったやらで負傷したウエンディは、青年によって治療を受けていた。

切り株にはさっきまで着ていた打裂羽織を敷き。清潔な手拭いを、口に含むなどして衛生上問題ないと判断した泉の水でぬらしてわずかに腫れてしまった挫いた足に巻き付けたり。戦闘だけでなくアフターケアにも長けているように見えた彼だったが、繊細さを要求される動作にはそこまで器用な人間ではないらしく、持参していた薬草を傷口にあてる動作はいささか荒い。

「ちょっと！ もっと丁寧にやりなさいよ、この子はあんたほど頑丈じゃないのよ？」

「もうシャルル、失礼だよ！」

恩人にたいしてきつい言い方をするシャルルに、ウエンディが叱責をとばす。

というのも、逃走中にこそ負傷しなかったシャルルだがウォードッグと最初に接触したのは彼女であり、そのとき負った切り傷を手当てする道具を貸してくれたのは彼なのだ（治療自体は自分でやると拒否した）。

彼とてこんな自体は予測していなかったのか治療道具といっても止血用の薬草、包帯程度だったがそれでも応急処置に十分助かる道具であった。

「……悪かったわね」

カッとなりやすいシャルルだが、その実にも礼儀知らずというわけではない。膨れっ面ではあったが、謝罪の言葉を並べた。

「別にいいよ、僕が雑だったのは事実だし。あまり誰かを手当てするっていう場面が多くないから不馴れでね」

自覚はあったらしく、手つきがさらに丁寧になる。とはいえ、傷口に薬草を当てている以上手つきの丁寧さや雑さは関係ないのだが。ウェンディもこの程度のことと声をあげるのは子供っぽいと思える限りの我慢しようと歯を食い縛るが、涙をためながらプルプルと震える様はむしろ声をあげられるより痛々しい。

「そういうえば、こんな危険な森で君たちみたいな娘が護衛もなくなっていたの？」

見かねたのだろう、気をそらせるためか青年が話題を持ち出した。

「あ、それはですね。私化猫ケット・シエルターの宿っているギルドに所属してまして、その依頼でこの木の実を収穫してたんです」

「ケット・シエルター？ 聞かない名前だな……。でも確かにその魔法マークはギルドに所属する人間の証だし、信じるよ」

「あはは、結構森の奥にあるギルドですから。依頼も近くの村からくるちょっとしたものばかりですし、知名度はゼロに等しいかもしれませんが。私、このあたりは結構詳しいんですけど町に行くことは多くないのではっきりとは言えませんが」

「なるほど、来慣れてるから護衛もなくなってきたわけだ。でも、普段はしらないけど最近ウォードッグが徘徊してるから危険だって話だし、今度からは戦えるギルドメンバー助力を頼んだ方がいいよ」  
「ウォードッグが……？ そういえば、急にだったから忘れてまし

たけどウォードッグでもっと寒い地域にいるモンスターですよ。なんでこんな暖かい地域に……」

「それなんだよ、あいつらの生息地域に天敵のワイバーンが出たって話も聞かないし……。ま、そういった原因説明とかは僕の仕事じゃない。それこそ専門のギルドに頼んだほうがいいだろう」

「そういうわけにはいかないわよ」

他人任せ結論に至った青年に、すぐさま反論したのは先ほどのこともあってか辺りを警戒していたシャルルだった。

特に問題があるような発言をしたつもりはなかったのだろう、首をかしげる青年にシャルルはピシッと指を突きつけた。

「私たちのギルドはここからそう遠くないの。それに、このあたりは依頼やギルドでの生活にも欠かせない薬草とかもいっぱいはある。ギルドには結界があってモンスターなんて進入できないでしょうけど、一歩出ればあんな危ないモンスターがうろついていたんじゃない、やたまったものじゃないわ！ 戦える魔導師もいないし、近くの集落なんかも襲われるかもしれないし……」

「戦える魔導師がいない？ 君たち、さっき僕に補助系の魔法かけてくれたり飛んだりしてたから魔導師ギルドなのかと思ってたんだけど。二足歩行で話す猫も、あんなにしっかりした魔法を君みたいな子供が使ってるも初めてみたよ」

意外そうに、青年は自分が手当てしている少女と奇妙な猫を交互にみる。

「えっと、私たちにギルドって生産系のギルドなので戦闘に関して

はそれこそ護身術ができる人も少ないくらいで……。魔法を使えるのは私とシャルル、あとマスターと数人だけなんです。といっても、私は補助系、シャルルは飛行魔法。マスターは結界とかの防衛魔法、ほかの人も植物の成長を促したりちよっとした占いができるくらいで、戦えるような魔法はまったくです。シャルルのことや私の魔法は……」

「あ、言いつらいならいいよ。それにしても、そっか……。依頼にもあったけど普段は静かそうな森らしいし、戦いの知識はほとんど必要なかったってわけだ。もしもの場合にも防衛系の魔法は充実してるようだし、僕みたいな人間もいるしね」

「僕みたいな人間？」

「ああ、そういえば言ってたかったか。見てわかるとおり、僕は傭兵だ。まあ一国を相手取った戦争から子供のお使いの護衛までなんでもござれの何でも屋といったほうが近いかな。そして、さっきのウォードッグ。あれの撃退および討伐が今回の依頼内容だ。たぶん君たちの知ってる近隣の集落ってところからの依頼。五十匹くらいかな、戦ってるうちに逃げた数と同じだしさっきも言ったとおりもう平気だと思うよ」

「で、でもこんな地域に来るほど追い詰められてたとしたらもしかってことも……」

「まあ、そんな時はまた僕みたいな人間が借り出されるさ。魔法を使うようなモンスターじゃないし、どこかの魔導師ギルドから人員を派遣してもらうのもいいかもね。よし、おしまい」

「あ、ありがとうございます」

大したことないよ、と手を振りながら青年は腰を上げた。立ってみると、以外にしっかりした体つきをした男性だ。

背丈はそこまで高いというわけではないが、男性として十分だろう。和服のため体の線は見えづらいが草鞋の足や手首の太さから推測するに細身らしい。少々長い襟足、目をぎりぎり覆っている前髪。失明したのだろうか、左目は包帯に覆われ右目は眠たそうに細められている。

青年は、そのまま治療道具を片付けようとする。  
声を上げたのはウェンディだった。

「え、片付けちゃうんですか？」

「ん？ あれ、まだ手当てしてないところあった？」

「いえ、私は大丈夫ですけど……。えと……」

言い淀むウェンディに青年は一瞬首をかしげ、ああと手をうった。

「僕なら平気だよ。あの程度じゃ怪我なんかしないさ」

「でも、ウォードッグにあんなに噛まれてましたし……。私、結構怪我の手当てとか得意なので、もし良ければ……」

「んー、そう言ってくれるのは嬉しいんだけどね。ほら」

青年が打裂羽織の下に着ていた衣服はこの国では珍しい東方の『着物』といわれるゆったりとしたもので、打裂羽織と同じく真っ黒な生地に素人目にも職人技とわかる美しい彼岸花が描かれている。本来はその下には下着程度しか着ないのだが、手当ての最中屈んだ際見えた下半身にはくるぶしより少し上までのジーンズを穿き、上半身はノースリーブを着ている。

そんな着物の袖をおもむろにまくると、そこには傷ひとつない男性にしては少々白い腕が覗いた。手首から肘にかけてテーピングが

なされていたが、それは元々らしく血痕などはない。

少なくとも、掌、手首、二の腕あたりを噛まれていたはずなのが、何度見直してもそこには圧迫され赤くなった痕すら見られない。衣類が特殊な素材でできている可能性もあったが、だとしたら直接噛ませたはずの掌まで無事なのはおかしいだろう。

ぱちくりと目を白黒させるウェンディとシャルル。

予想していた反応なのだろう、青年はわずかも気を悪くした様子もなくそっと腕も袖中へと戻した。

「僕も君と同じく魔導師でね。ちょっと、その魔法が特殊なんだよ」

そう言って青年が手を伸ばしたのは、腰に携えていた自身の得物である黒い刀。鞘から柄にかけて真っ黒な刀だが、それとは関係なく奇妙な見た目をした刀だった。

特に、大抵鞘というものは木製であることが多いのだが、光を吸い込むように黒いそれは重量感あふれる金属で出来ている。本来は筭、栗形、下緒こつがいくりがたが備えられているはずの場所は握りやすいよう指の形に加工された特殊な形状をした取手のような部品が付いており、さらには拳銃の引き金トリガーと用心金トリガーガードが鞘口と水平に装着されている。銃口はないが、変わりに分厚くなっている鞘口の右側に穴が開いている。

そこまで付いていながら、まさかそれが飾りなどという訳ではなく。奇妙な付属品の数々は鞘の返り角かえりっのあたりまで続いていた。

まず取手の先にあったのが付属品のなかでも最も目立っていた弾倉マガジンだ。多少短いマが、これに至っては拳銃というよりアサルトライフルにでも付いていそうな湾曲した弾倉だった。しかし幅はアサルトライフル用の弾倉にしては太く、連射する類いのものではないはず

だ。その先には長方形の部品があり、数々の部品から連想するに排  
英口だろう。

エジクションポート

もちろんウエンディもシャルルもそんなに細かい知識など持ち合  
わせていないが、それでも珍しい形状であることに変わりはなく。

「珍しい？」

「……あ！ いえ、すいません。じろじろ見ちゃって」

「大丈夫だよ。まあこれは僕の魔法の説明には関係ないし、良けれ  
ば見てみていいよ」

青年は拳銃と一体化した――というには各部品の並びが違うのだ  
が――鞘から刀身を引き抜くとウエンディの目の前に静かに置いた。

一瞬躊躇したが、無言で促す青年にもう一度頭を下げながらウエ  
ンディはそれを手に取った。

ずしりと手にかかる、見た目通りの重量感。当たり前だが、刀身  
なくしてこの重さではウエンディには持って長く走れることもできな  
いだろう。

無知故に引き金にも手がのびるが、しっかり安全装置セイフティがなされて  
いるため青年が焦ることはない。

しばらく鞘を眺めていたウエンディだが、いかに普段武器に興味  
を持っているわけではない彼女でもここまでくれば刀身の方にも好  
奇心がわく。

やはりというか、刀は刀身含め真っ黒だった。否、黒すぎた。

切っ先から刃区はまちまで、鎧筋しのぎすじもなければ刃文はもんもない、影をそのまま

刀の形にしたような黒いだけの刀。鞘にない装飾の類いがなされ  
ていない鐔つばは簡易な楕円で、同じく柄は装飾どころか柄巻つかまきや目貫めぬき  
す  
らなかった。

しかし、機能美とでも言うのだろうか。

刃物を含めた凶器全般に興味どころか恐怖さえ感じているはずのウエンディが熱心に眺めてしまうほど、それらはどんな装飾をまとった宝石より美しく見えた。

「……そろそろいいかな？」

流石に待ちかねたのか、青年が咳払いをする。

それに、ウエンディはようやく自分がそれなりに長い間黒い刀に見入っていたことに気がついて、焦ったように返事をした。

「よし、じゃあ口頭で説明するのは面倒だから簡単に実演するよ」

云うと、なにを思ったのか青年が躊躇いなく自分の腕へとその黒い刀を降り下ろした。

唐突な出来事に制止する暇も、目を背けるひまもなく行われたがためにウエンディとシャルルははつきりと見てしまった。

黒い刀が青年の細い腕とぶつかって「火花を散らす」場面を。

ウエンディは補助の魔法を得意とする魔導師だ。当然肉体強化の魔法などの知識も多少持ち合わせているが、いくらなんでも刃物を弾くほど硬化させるような魔法は聞いたことがない。

テイクオーバーなど、硬い皮膚を持つ生物の特徴を吸収し肉体を変化させるというならわかるが、青年の腕は筋肉こそついているが普通に人間のものであり、相応の柔らかさを有しているように見える。

「驚いた？　これが僕の魔法。……といっても皮膚の硬化なんても

のは効果の一部なんだけど」

「一部、なんですか？ 鉄を弾けるほど体を硬化させる魔法なんて聞いたこともなかったので単一の特別な魔法なのかなって思ってたんですけど……」

「んー、まあ特別な魔法って言うのはあってる。自画自賛するわけじゃないけど、これは多分僕にしか使えないと思う」

そこまでいって、青年は悩むように言葉を止めた。

言っていていいものか、隠すべきか。そんなことを悩んでいるようだった。

だが、それも一瞬。

「信じてもらえるかはわからないけど、僕は滅竜魔導師ドラゴンスレイヤーなんだよ。だから、これは僕にしか使えない」

それに、ウェンディとシャルルは目をまん丸にして顔を見合わせた。

そんな反応は予想済みか、青年は困り顔で肩をすくめた。

### 【滅竜魔導師】

ドラゴンスレイヤーと名の通り、竜を迎撃し討滅しゆる魔法およびその魔法を行使す力を持った魔導師をさす言葉だ。その身はドラゴンの咆哮ブレスに耐え、通常の魔導師には持ち得ない莫大な魔力と身体能力を有する……と、言われている。

言われている、というのも魔法が存在するこの世界といえど半永久に生き続け一息で大地を抉ってしまうような、そんな生き物の存

在は所詮御伽噺程度にしか認識されていない。

自由に空を翔け、圧倒的な力を行使する絶対存在——ドラゴン。そんなドラゴンは、年齢にかかわらず誰もが憧れ夢見る存在であると同時に、そのあまりにも絶対過ぎる存在ゆえに古今問わず実在した、目撃したという話はすべて神話か作り話と一蹴されていた。故に、その竜を迎撃する魔法である滅竜魔法、滅竜魔導師も当然同等の扱いを受けるのだ。

自分は滅竜魔導師だ、などとおおっぴらに発言した暁には羨望の眼差しはおろかまじめに取り合ってくれる者すら現れないだろう。そんな台詞を嬉々と発言するのはせいぜい幻想と現実の区別もつかない夢見る子供たちだけだ。

ウエンディは幼い。しかし、物の区別も付かないほど幼いわけではない。それくらいのが青年にわからないわけもなく、初対面の相手にそんな冗談を言う意味もない。

うなずきあった二人は、なぜか意を決したような表情で青年に向き直った。

「……あの、私ウエンディ・マーベルっていいいます」

「私はシャルル」

「ん？」

しかし。

返答は、返答ではなかった。

確かにウエンディはシャルルとの会話の節に互いに名前を呼び合っていたが、明確な自己紹介はまだだった。礼儀正しく、しっかり者な彼女としてはこの自己紹介は少し遅めのものだったが、なにぶん唐突だったからだろう。青年は何を言われたのかわからないとい

った様子できょとんとしている。

「お名前を伺ってもいいですか？」

「あ、ああ……。僕はシュヴィ・クライス。どうしたの、突然」

ーシュヴィ・クライス……。初めて聞く名前、かな。

口の中でつぶやいて。

ごめんなさい、と一言断ってからウエンディはシャルルの耳元へと口を近づけ何かをささやく。

何かを提案したのだろうか。シャルルが渋った様子で唸るが、ウエンディが必死な様子で何かを再び囁くとやはり難しい顔をしたままだったが、肯定した。

「ちょっと、見てもらってもいいですか」

云うと、ウエンディはおもむろにシャルルへと手を伸ばした。うなずき、せっかく巻いた包帯を外し始めるシャルル。白い毛に覆われた肌にはいまだ鮮血が滲んでいる。

見るからに痛々しい姿。

意図があるのだろうか、青年がそれを止めることはない。

のばす、細い腕。

指先には、暖かな光。

先ほど青年に力を与えた際にも見せた、力強くも癒しを感じさせる光だ。

光は収束し、シャルルの傷口へと集まり、そして……

「……………」

眠そうな青年の半目が、驚愕にわずかに見開かれる。

ウエンディの細腕から流れる光は、シャルルの腕の傷を瞬く間に消し去ってしまったのだ。

まるで、傷口が自然治癒していく光景を早送りで見ているような、そんな光景。

治癒魔法。

滅竜魔法と同じレベルで存在の証明がなされていない魔法だ。

血痕だけ残し、完全に治癒しきったシャルルの腕。

うなずき、痛む足も忘れ立ち上がったウエンディは、すでに行った自己紹介を修正する。

「私は、ウエンディ・マーベル。あなたと同じ、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導師です」

「本当に、ありがとうございます。ウォードックを撃退するだけでなく薬草までいただいでしまって……最近はめっきりとりにいくこともできなかつたのでとても助かります」

「ああ、いえ。そっちは僕にはなく彼女たちにお礼を言うてください。薬草は僕が採取したのではなく彼女たちが採取したもので、彼女たちの好意によるものですから」

云うと、横で青髪の少女がとんでもない、といわんばかりに首を横に振った。先の戦闘で補助をかけながら謝ったことといい、いいものを持っているのにいささか自主性にかけている少女だ。

よほど困っていたのだろう、集落の住人たちは僕たちが見えなくなるまでいつまでも頭を下げていた。

無言で、ウェンディ・マーベルと名乗った少女と並んで歩きながら今日起こったことを思い返してみた。

ウォードックの撃退。旅をしながらの日雇い傭兵の身では久しくなかった骨のありそうな依頼に嬉々としてのぞんだのは今朝のことだ。たまたま行き付いた集落の人々に好意で食事と屋根つきの寝床を提供してもらったお礼として、自分が基本的何でもする傭兵崩れであると説明すると、是非にと依頼されたのだ。

目的こそあっても行先は特にない僕の旅路、行く先々に何があるかなどしらべたことはない。

ないが、一般的な知識程度は持ち合わせている。

寒冷地域にのみ生息するはずのウォードック。それがこんなに暖かな地域で目撃され、被害が出ている。

内容としてはいささか虚を付かれたものであったが幸い単独で討伐が可能な類のモンスターであったため、食事と寝床のお礼としては十分だと無償で引き受けたのだ。

集団で狩をするモンスターであったことも幸いし、そこまで迷うこともなくウォードックを発見。あくまで依頼内容は殺害ではなく撃退であったため適当にあしらっていたのだが……。

「……………」

残念そうな表情で僕の横を歩く少女。

そう遠くない場所にあるケット・シエルターというギルドの一員だというこの子の元に逃げた一部のウォードックが襲い掛かっていたのだ。

何とか幼い命が食いあらされるといふ最悪な結末は逃れたものの、少々怪我を負わせてしまった。

まあ、それは珍しいことではない。

否、珍しいほうがいいのだが、あいにく一箇所に常駐している人間ではないので依頼を受けたところには誰かがすでに怪我を負っている、なんてことは日常なのだ。今回のようにほど辺鄙な場所に住んでいる人間からの依頼でもないかぎりその町に拠点を構えるギルドの人間が問題を起きる前に解決してしまうため、僕に来る依頼は大体起こってからのものであることが多い。

彼女の場合は、依頼主と関係する人間ではないので少々特殊なケースだったが、それでも怪我の手当てをして送り届けておしまい、となるはずだった。

しかし、彼女の発した意外な告白により、僕たちはただの他人、というのは難しい縁のもち主だった。

## 滅竜魔導師。

存在自体がファンタジーとされるドラゴンを倒すための魔法を持つ者。

どうせ今後会うことはないだろうと、どうせ子供だからどうってことないだろうと、軽い気持ちで見せた滅竜魔導師としての力。

せいぜい、すごい魔法ですね、で終わるだろうと思っていたのだが彼女は予想の斜め上の行動……自分も滅竜魔導師だと名乗り、失われたはずの魔法、治癒魔法を俺に見せたのだ。

ウォードックとの戦闘時にかけられた補助魔法。

幼い少女が操るにしてはオーバースペックのそれを平然と扱う姿は彼女が只者でないことを予感させてくれたが、まさか僕の旅に終符を打ちかねない重要な人物だとは思いつまなかった。

自分だけだと思っていた滅竜魔導師。まさかこんな形で合間見えるとは、とあの場では嬉々として彼女に詰め寄ったのだが……。

「ねえ、本当に何も知らないの？」

「残念ながら、ね。僕も探してる側の人間だったんだから」

「なによ、折角ウエンディの親が見つかるかもって思ったのに」

集落から歩くこと十数分、ようやく沈黙を破ったシャルルはしかし、僕の言葉に残念そうに俯いてしまった。

そう、彼女もまた、僕と同じく滅竜魔導師を探していたのだという。

ウエンディちゃんの使う滅竜魔法は、天空魔法。「天竜グランディーン」という天を司る竜に教えられたものだという。物心付いたころからの育ての親らしく、魔法のほかにも一般常識や教養などの人として生きていくために必要な知識のほとんどはその竜から教わ

ったらしい。

しかし、「天竜グランディーネ」はある日突然消えてしまったらしい。

ケンカはしたことすらなく、遠出の際にはかならず一緒についていったのでそういった類のものではないとすぐにわかったという。結局グランディーネがその後ウエンディちゃんの前に姿を現すことはなく、いろいろあって今のギルドにやっかいになっているそうだし。時に。

なぜ僕が、竜の消えた日や、彼女らがもたらす知識の内容に対し疑問系で語っているのかというと……。

「シャルル、そんな言い方はよくないよ。クライスさんは私よりずっと大変なおもいをしてたんだろうし」

「なに、僕は幸い戦う力もあったしね。一般知識も、ウエンディちゃんの話聞いた限りしっかり教わった後だったらしいし」

「でも、記憶がないなんて……不安じゃなかったですか？」

「まあ……ね」

僕が探していたのは、僕に力と知識を与えてくれた竜の記憶だ。

目的はあっても行き先のはっきりしないこの旅の始まりを、自身が知らないのだ。

いつからこうして旅しているのか。どうしてこうして旅しているのか。本当の目的はなんだったのか。

気づいたら旅をしていた、というのが記憶のはじまりだ。

思い出せる限りで、最も古い記憶は七年前のもので。そのときあったのは、シュヴィ・クライスという名前と、ごく一般的な知識の数々、そして「刃を司る滅竜魔法」だった。

刃竜。

それが僕にさまざまなものを与えてくれた竜の二つ名。

ただし、本当の名前は、わからない。

その答えを持っているかもしれない同じ滅竜魔法の使い手に会い、そして相手も多少違うが似たような境遇にあった。険悪な雰囲気にはならずとも、命を助けた人間と助けられた人間として仲むつまじく話すには少々気分が落ちてしまい、居心地の悪い無言の空間が続いていた。

結局、わかったのは僕たちに滅竜魔法を教えてくれた竜は消えてしまった、ということだけ。僕の記憶の始まりとグランディーネが消えた年月が同じ七年前と一致していることから、おおよそそんなところのはずだ。

僕としては自分が滅竜魔導師である、という記憶を根本から疑わねばならなかった日々をすごしていただけに落胆してはいても得たものがなかったといえば嘘になるが、滅竜魔導師を自分の親の手がかりだと思っていたこの子には落胆が一番大きいだろう。

「自分が一人ぼっちだってわかったとき、悲しくなりませんでしたか？ 私、ずっとグランディーネと一緒に生活してたからいきなりいなくなっちゃったときは一日中泣いてたんです。泣いていれば、きっとグランディーネが私の前に戻ってきてくれるって……」

「そっか、辛い思いをしてきたんだな……。僕の場合、自分の正体もこの力をくれた竜の名前もわからずだったし、そりゃあ最初は不安な気持ちにもなったし、泣きたくなる日もあったよ。でも、厳密にはわからないけど一人で生きていけるだけの年齢ではあったし、悲しんでいる時間は少なかったよ」

「そう、ですか。強いんですね、クライスさんって」

「その歳でそんな経験をしている君に言われてもね。ウエンディちゃんのほうがよっぽど強いよ」

そうでしょうか。

そうつぶやくウエンディちゃんの顔は、まだ幼さを残す少女がするには少々達観したものだっただ。

子供らしくほめられたら素直に喜ぶ、ということのを忘れてしまったような顔だ。

普段はどうかはわからないが、僕という同じ滅竜魔導師と会ったことで押さえ込んでいたグランディーネとの別れの悲しみがぶり返してしまったのならば、この出会いが決していいことばかりであつたとはいえない。

歩けるとはいえ怪我をしている身だ。一応ギルドまでの護衛はすると申し出ているが、僕の存在が彼女の辛い過去をフラッシュバックさせる原因となるのならば、非常に惜しいことだが、そうそうに立ち去ったほうがいいのかもれない。

「そういえば、クライスさんの滅竜魔法ってどんな魔法なんですか？

私は、さっき見せた補助魔法と治癒魔法が主で、あとはその派生系のものが少しある程度なんですけど」

なんて、僕の思考を知ってかしらさか少女は再び口を開いた。

そこには先ほどの達観した表情はなく、純粋な興味を示す相応の表情をした少女がいた。

目的の情報は得られなかったとはいえ同じ力を持つ人間同士であることに違いはない。自分と同じで、しかし異なった能力を、彼女は知りたいのだろう。

よかった、しっかりと子供らしい一面もあるんだな。

どうせここまで話したのだ、どうせなら思い切って今まで話したこともなかった自分の魔法を教えてやろう。

「うーん。僕の魔法はさっきも言ったように刃を司る魔法だ。でもそれだけってわけじゃない。主だったものをあげるとすれば肉体強化が最たるものかな」

「あ、さっき見せてくれたやつですよ。刃物をぶつけても切れるどころか弾くなんてびっくりしました。そのせいで噛まれたときも怪我をしなかったんですよ」

「そ。ほかにも防弾や防爆、防毒防呪なんかの作用もある。といっても、絶対的な防御力を誇るのは対刃で他の防御はおまけみたいなもの。戦闘ギルドなんかのS級魔導師のつかう魔法なんかだと抜かれるかもしれない」

試したことはないけれど、と一応注意しておく。

「随分自信があるのね？」

話題がいい方向に切り替わったのを悟ったのか、これ見よがしにシャルルが会話に割り込んできた。

「そりゃあ食いつなぐために結構無茶な依頼を受けることもあったからなあ。ワイバーン種となんかも戦ったことがあるし、一番危険な依頼だと闇ギルドの討伐作戦なんかにも参加したことがあるよ」

「や、闇ギルドの討伐!？」

「そんなに驚くなよ、なにも大御所の相手をしたわけではなし、討

伐に参加した人数は三十人。S級魔導師もいたから僕がやったのは逃げ出そうとした雑魚数人とあっちのS級をたたき伏せたくらいだ」

「さりとてすごいことやってるじゃない」

「手負いの獅子は恐れるに足らず、っていうだろ」

閑話休題。

こんな子達に自慢話をしてどうする。

語るような知り合いもいなかったから少々饒舌になってしまった。

「で、他の魔法だが……意外にレパートリーが少ないんだよね俺の滅竜魔法」

「そうなんですか？」

「うん。肉体強化のほかには、空中で踏ん張るための足場を作って空を走る魔法とか、これくらいかな」

云って。

やって。

後悔した。

一人と一匹から上がったのは、賞賛の言葉ではなく驚愕と恐怖からくる悲鳴だった。

同類の存在に、僕自身もテンションがおかしくなっていたようだ。普通驚くだろう。

なんの変哲も無く見える人間の腕からいきなり黒い刀が生えてくれば。

「ご、ごめん。驚いたか……？」

「あ、す、すいません！いきなりだったから、つい……」

「いやいや、普通の反応だから大丈夫」

「い、痛くないんですか？ 血は、出てないみたいですけど」  
「大丈夫」

そういわれても、そうですかとはいえないのだろう。恐る恐るといった様子ではあるが、ウェンディちゃんは刀の根元、つまり刀が突き破っている手のひらを注視している。

突き破る、と表現してはいるものの実際はきれいに皮膚が切れているので刀が手から生えているように見えるだろう。それでも見てあまり気持ちのいいものではないので、手のひらにテーピングをしているが。

自分自身、初めて使ったときは見た目で痛くも無いのにイタイイタイと転げまわったものだ。

「僕は〔身刀<sup>みがたな</sup>〕って呼んでる。感覚的には腕の骨が一部変形して突き出してる感じかな、このまま握ったりしなくても何かを切ったりできるし」

「私の魔法と違って、自分の体そのものに直接竜の特徴が現れるんですね。グランディーネ、こんな魔法は教えてくれなかったなあ…」

「僕も他人に譲渡できるような魔法は補助系の使えないよ。肉体強化は治癒力も強化してくれるけど、治癒魔法ほどすぐは無いらしい。竜といえど全知の存在ではないだろうし、一長一短って感じだろうね」

「そうですね。私、グランディーネしか竜のこと知りませんでしたけど、人みたいに竜にも得意な魔法や嫌いな魔法があるのかもしれない」

納得してくれたようなので身刀を引き戻した。

得意げに語ってはいるものの、僕自身滅竜魔法とは名の通り竜を滅する力をもつ強力な破壊魔法だと思っていただけに、ウエンディちゃんのような補助系の魔法に特化したドラゴンスレイヤーがいるとは思っていなかった。

これもこれで、ひとつの発見といえるだろう。

「その剣も、クライスさんの魔法で作ったものなんですか？ 珍しい形してますけど、すごいきれいな剣ですよね」

「ありがと、でも残念ながらこれは僕の魔法じゃないよ。刀身は身刀を使ってるけど、この刀の特別な構造は有名な刀鍛冶の作品らしい。とある依頼を受けたときの報酬としてもらったものだよ」

「あ、だから刃の部分が黒かったんですね」

それからしばらく、ウエンディちゃんはいろんな質問を僕にしてきた。

依頼で行った珍しい町の話。

戦ってきたモンスターの話。

旅の途中で聞いたドラゴンスレイヤーの噂や伝説。

合間合間に聞いた話では、彼女はギルドはギルド自体が集落となっっているらしく、その生活で全てが完結しているのだという。

食料などは自給自足、必要な物品を買うお金は集落に伝わる織物技術で編んだ服などが収入源であるらしい。

今の生活にはとても満足していて、集落の仲間たちもみな優しい人ばかりだそうだが、少々外界とのつながりが浅く、閉鎖的なギルドであるためドラゴンスレイヤーやドラゴンの情報があまり入って

くることが無く、もどかしく感じることもあるのだとか。

「あ、すいません。なんか質問責めみたいになっちゃって」

ウエンディちゃんがふと我に帰ったのは、十数分後のことだった。僕としては自分の旅の話を改めて誰かに語る、というのも新鮮でとくに苦は無かったのだが、生真面目で全てに対して遠慮気味なこの子にしてみれば失礼なことをしたように感じたのかもしれない。

「いいよ、僕も旅を改めて振り返ってるみたいで面白かったし」

「そうですか？ そういってもらえるとうれしいです」

そうだ、とウエンディちゃんが突然手をたたいた。

「クライスさん、よければギルドに寄っていきませんか？ お茶か何かご馳走します。まだ、助けてもらったお礼ができてないですから」

「え？ ……うーん、まあ君に怪我させちゃったわけだしギルドのマスターに挨拶くらいしていこうと思ってたけど……。原因が僕にある以上、お礼なんて悪いよ」

「原因がクライスさんだなんて、そんなことないですよ。あんな危険なモンスターを何十匹も相手にして一気にやっつけちゃうなんて難しいでしょうし、助けてもらったことには変わりないですから」

「でもなあ……」

「無駄よ。ウエンディは言い出したら聞かないんだから」

「そう？ じゃあお言葉に甘えようかな、正直小腹がすいてたし」

「よかった。あ、見えてきましたよ」

ずっと続くかと思われた森の道。

ウエンディちゃんが指差した先には猫の頭を象ったような、特徴的な建物が見えた。

「あれが私のギルド、ケット・シェルトー化猫の宿です！」

・ ・ ・ ・ ・

第一印象としてのギルド、ケット・シェルトー化猫の宿はまさに集落といったものだった。

アーチ状の門のような入り口をくぐってまず見えたのは、猫の頭のような特徴的な建物。あれが、通常のギルドでいう集会場のようなものなのだろう。聞いてみれば、やはりマスターはそこにいるらしい。

だが、そのほかにはこれといってギルドに関するようなものはなく、古い様式の簡易住居や田畑が並んでいるのみだ。通路とそのほかの見分けも草木の有無のみで、舗装されたというよりは踏み固められたといったほうが正しいような気がする。

あたりはもろに森と隣接しており、正直な感想としてはさきほどの集落のほうが大分ましな集落としての形をなしていたような気さえする。

まあ、それはこのギルド周辺に張られている強力な結界がなければ、だが。

ウエンディちゃんはたいしたことは無いというような様子で話していたが、これはなかなかお目にかかれないレベルの結界魔法だ。それなりに大きなギルドの人間と共闘したり戦闘したりはあったが、防御魔法という一点に括るのであれば、僕の記憶の中では最強クラスに入るだろう。

普段はモンスターが少ない森の中でここまで強力なものが必要なのかという疑問もあるが、先ほどのウエンディちゃんたちの様子を見るに外部情報があまり入ってこない場所なのだろう。備えあれば憂いなし、というやつか。

「あの、やっぱりうちのギルドって他のところと結構違うんですか？」

少々きよろきよろしすぎたか、ウエンディちゃんが不安げに僕の顔を覗き込んでくる。

わずかに視線を振れば、とがめるようなシャルルの視線も、僕の目を睨んでいる。この子の気弱さを踏まえれば過保護になる気持ちもわかるけれど、初対面に近い人間に敵対心むき出しというのはどうなのだろうか。

「珍しいといえば、珍しいかな。普通、というか僕が見てきたギルドってものは一個の大きな集会所があってそこにいろんな人間が集まって依頼をこなすって形だったし、集落が丸ごとギルドって言う

のは初めて見たよ」

「そうなんですか。他のギルドの話って、作った物売りに行ったときとかに聞く噂話とか雑誌とかでしかしらないのでこれが普通なのかなーって」

「生産が主なギルドだっけ、それにしても外界との接点がそれだけなの？」

「うーん……そう、ですね。ギルドって言っても本当に集落に近いので普段は依頼で近くの集落や村からのちょっとしたお願い事とか、私の治癒魔法で怪我を治してあげたりとかがあるくらいであんまり……。ほとんど自給自足なので、そこまでお金が必要ってわけでもないですから」

「そっか。ま、初めてみたとは言ったけど、なにも派手にモンスターを狩ったり金融取引するだけがギルドじゃない、知らないだけでわりとあるだろうね」

ある、はずだ。

ギルドといってもその業務内容は多岐に渡るため、本気で調べなければどんなものがあるかなどということはわからない。竜の噂以外基本世間話というものを気にしなかった僕ならなおさらわからない。

「あら、ウェンディ。お帰りなさい……、そちらの方は？」

と、建物の中から若い女性が出てきて、僕の存在に気づいたせいか驚いたような様子で疑問を挨拶と同時にウェンディちゃんにへ投げかけた。

二十代前半くらいだろうか、ウェンディちゃんが比較的普通の服

装なのに対し、その女性は占い師のような、どこか民族衣装を連想させる独特な衣類をまとっているためわかり辛い（東方の品である和服をまとう僕が言えた筋合いではないが）。

民族衣装、というものを踏まえて考えるとそういえばここは年季が入っているような印象も受ける。もしかしたらウエンディちゃんが来る結構前から細々とギルドとしての活動をしていたのかもしれない。

「あ、ペテル。ただいま！ この人はクライスさん、森でモンスターに襲われてたところを助けてくれたの。だからお礼にお茶とか――」

「モンスターに襲われた!？」

大声が、ウエンディちゃんの説明をさえぎった。

ちょっと驚いた、にしては少々声が大きく、ウエンディちゃんは肩を跳ねさせ硬直してしまった。

が、ペテルと呼ばれた女性はかまわず接近し肩をつかみ、揺らす。

「け、怪我とかしなかったの？ シャルルも！ もししてたら見せて頂戴、葉草の備蓄はあるから安心して。ああ、でもこの森はモンスターがいはいはずなのにどうして……!」

過保護なのは、どうやらシャルルだけではなかったらしい。

取り乱したペテルさんの声は相変わらず大きく、ウエンディちゃんが彼女をなだめている間にぞろぞろと人が集まってきた。

「どうした、ペテル！ なんの騒ぎだ?」

「ウエンディが襲われて怪我したらしいの！」

「ウエンディが!?」

「そんな、今日は近くに木の実取りに行くだけの簡単な依頼に行っただけだろ！」

「襲われたって何に！ モンスターはいないはずよ！」

「って、おい。この黒ずくめ誰だ！」

「まさかこいつが……！」

「ウエンディ、ペテル、シャルル！ 早くこっちに！」

おっと、笠をかぶりなおしたのは失敗だったかな。全身を隠すよ。うなこの格好は防寒やら防塵やらに役立ち、寝袋代わりにもなるのだが、確かに怪しい格好であることは自覚している。ウエンディちゃんとシャルルは連れて行かれ、人垣の中へ消えていってしまった。まずい、農業工具持ち出してきたる人がいる。

鎌に高枝バサミ、トンカチに剪定バサミ、のこぎりに斧。なかなかバリエーション多彩だ。

あと、やばいやばい。チェーンソーと鉈は本格的にやばいから待って。防刃性能最強だけど痛みが無いわけじゃないの。岩にたたきつけたように刃の部分が吹き飛んだりするかもしれないし危ないからしまおうよそれ。

「み、みんな落ち着いて！ ちょっと怖い格好はしてるけどこの人は私を助けてくれた人だよ！」

ギルドメンバーの方々が構えの姿勢から突撃の姿勢に変わろうとしていたギリギリで、人垣の中から救いの声が響いた。

しかし、やはり怪しいのか。ナチュラルに言われたからちょっと

傷ついた。

人の隙間を縫って細い腕が突き出してきたかと思うと、そのままわずかな隙間を作ってなんとか、といった様子で若干髪の毛が荒れたウエンディちゃんが出てきた。シャルルは無理だったらしい。

はあはあ、と一瞬にして大分疲れた様子のウエンディちゃんは、ペシペシと叩いて荒れた髪を直すと僕の目の前に立ちはだかり、ピシッと過保護の集団を指差した。

「ペテルにも言ったけど、私が襲われたのはモンスターにだよ。ウオードックっていうモンスターがなぜかこの森にいついてて、この人はその撃退の任務にきた傭兵さん！」

「そ、そうなの……？」

「そうなの！ だからみんなそんな危ないものしまって、失礼だよ！」

よほどの信頼を寄せられているのだろうか、その一言でメンバーたちは物騒なものを下げた。

「すみませんクライスさん。みんないい人たちなんですけど、お客さんがあんまりこないところなので……」

「い、いや気にしなくていいよ。戦える人がいないって聞いてたからちょっとおどろいたけど」

「ご、ごめんなさい……」

「気にしなくていいってば」

改めて見れば、人垣の中に子供の姿はない。

ここにいる十数人がギルドの全員というわけではないだろうが、もしかしたらこの子はこのギルド最年少なのかもしれない。

それほどまでに、この人間の過保護さは過剰だった。いいことだ。

「あの」

「はい？」

振り向けば、先ほどペテルと呼ばれていた占い師姿の女性が申し訳なさそうにこちらを伺っていた。

「申し訳ありませんでした。なにぶん客人が少ない場所なもので失礼なことを……」

「ああ、いえ。お気になさらず、怪しい格好をしていることは自覚していますから」

「そういつていただけると恐縮です。それで、失礼ですがここにはどういった理由で……」

「言ったでしょ、ペテル。お礼がしたいから私が無理を言って来てもらったの」

「……そ、そうなの」

再びウェンディちゃんによる指摘が入る。

やはり外界との接点をあまり持たないだけあり、排他的な面のあがるギルドなのだろうか。敵で無いと理解してはくれたようだが、かといってそこまで友好的な雰囲気は無い。

もちろん僕の存在が嫌がられているような様子は無いのだが、なんと云うのだろうか……おっかなびっくりしたような様子だ。

なにかやましいことをしているのか……と思わないでもないが、違法な薬品などの臭いは感じない。なにより、幼い少女一人のため

にここまで必死になれる人がそんなことをしているはずが無い。

「わかったわ。でも、一応このギルドの人ではないし、マスターに一回会ってもらってからにしなきゃだめよ？」

「わかってる。心配しないで、いい人だから」

その返事に、こんどこそ安心したらしいペテルさんは先ほどより若干柔らかな表情で僕と視線を合わせた。

「ウエンディを助けていただいております。皆の代表として、私がお礼を言わせていただきます。小さなギルドですのでたいしたものはありませんが、歓迎します。ウエンディ、お茶の用意はしておくから」

「うん、ありがとうペテル」

一転、笑顔が多くなったギルドのメンバーたちに見送られ、僕たちはその場を後にした。

「マスター、ただいま戻りましたー」

猫の頭を象った建物の入り口からしばらく歩くと、文字通り集会所といえるような広間の奥に座る老人の姿が見えた。どうやら彼がマスターらしく、ウエンディちゃんの声に、おお、と柔らかな笑顔を浮かべて反応を返していた。

彼もまた、世間的に普通といえないような独特な衣装に身を包んでいて、もしこの老人を先に見たのならばここが一部族の集落だといわれても何の疑いも抱かなかっただろう。

この集落周辺に張ってあった結界魔法の使い手らしいが、なるほど。腰は曲がり、目も半ば閉じてしまっているような小さな老人だが、なかなか強大な魔力の持ち主だ。さぞ昔は名のある魔導師だったのだろう。

また、お前は誰だというやり取りがおきるかと思ったが、こちらに気づいたらしい老人が声をあげる前にウエンディちゃんとシャルルが説明をしていた。

「なぶら、わかった。おまえさん、シャルルとウエンディをモンスターから救ってくださったのじゃな？」

「え？ ああ……まあ、一応結果的にはそうですね。僕も食いつかれたところを彼女の魔法に救われましたし、一方的なわけではないですよ」

「なぶら謙遜することはない。この子達は戦う魔法をもたない、すでにペテルがしてくれているようだが、化猫ケット・シェルターの宿のマスターとして、このローバウルが改めて感謝しよう。ありがとう」

そういって頭を下げたマスターローバウルの口からは、ばたばたと液体が――に的におい的に酒か何かだろうか――流れ落ちた。

「ちょ、マスター！　いつもお酒はちゃんと全部飲んでから話なしなさいって言ってるでしょ！」

「んん、すまんなシャルル」

「あわわ……マスター、これ。ハンカチで口元拭くから口閉じて」

「すまんなウエンディ」

前言撤回。大丈夫かこの爺さん。

「ウエンディちゃん、マスターローバウルは調子が悪いのか？」

「あ、心配しないでください。マスターいつもこうなので」

それはそれで心配なのだけれど……。

しばらくして、先ほどのメンバーのうち数人が運んできてくれたお茶とちょっとした菓子の前に、僕は改めてマスターローバウルの前に座っていた。

ボケ始めているのかという疑いは会話をするうちに杞憂だとわかり、竜の存在についていろいろと情報交換を行ってはみたが、長い付き合い日を生きているとはいえやはり多くは伝説や御伽噺だった。予想通り古くから存在する集落とのことだったので期待したが、文献などもウエンディちゃんの頼みですべて調べつくしてあるらしい。

「なるほど、自分の記憶を探して一人旅か……なぶら、苦勞したところじゃろう」

「旅自体は大して辛くはなかったんです。苦勞も、それほど。幸いその辺の魔導師には負けないくらい力もありましたから。ただひとつ、どこにいてもドラゴンが架空の存在だって言われるのが不

安でしたが……」

「うむ、己の唯一の記憶すら否定されてはな」

「そういった意味では、今日ウエンディちゃんと会えたのは僕にとって大きな進展でした。この記憶が僕の過去を知る道しるべとして間違っていないかったとわかったわけですからね。ガセネタがほとんどですけど、こうして本物にあえましたから。これからは気長に探していけそうですね」

ありがとう、呟けばウエンディちゃんはとんでもないとばかりに首を横に振った。

しかし実際そうなのだ。

唯一の記憶、その確実性があやふやだった日々が終わりが来た。話しながら、今更ながらその事実が予想以上に僕にとって大きな進展だということが実感できた。

少なくとも、あるかもわからないものを探す状態から確実にどこかにはあるものを探している状態に変わったわけだ。一番の気がかりが取り除かれたのだ、感謝するのはむしろ僕のほうかもしれない。

「……………」

ふと会話がとまり、マスターローバウルが何かを考えるように目を閉じてしまった。

「マスター？」

不安げな声をウエンディちゃんが上げるが、マスターローバウルは動かない。

寝てるのか、と思い始めたころ。ゆっくりと開かれた瞳は、まっすぐに僕のほうを向いていた。

「クライス、お前さんは世界中を旅しているといったな」

「世界中とまでは行きませんが……それなりにいろんな場所は行ってきたつもりですよ」

「……どこか一ヶ所にとどまる気はないのか？」

「質問の意図を汲みかねますが……。いままでならいいえ、ですけど記憶が正しいものとわかった今、どこか大きな町の大規模ギルドに参加したりして集中して情報を集めるのもいいかなあと」

「なぶら……ならば化猫くまねこの宿はどうじゃ？」

「はい？」

「ま、マスター？」

マスターローバウルの言葉が予想以上に奇天烈なものだったせいか、僕と同時にウエンディちゃんも疑問の声を上げた。シャルルも、控えていたメンバー数人も、何を言っているのかといった様子だ。

ここ、とはもちろんこのギルドのことだろう。

大きな町、大きなギルド。その二つには、悪いがかすってもいないこのケット・シエルター。

酒をダバダバと戻した姿を見ていたのでまたちょっとした面白発言かとも思ったが、彼の目は真剣そのものだ。

「ウエンディはお前さんと同じ滅竜魔導師じゃ。そして、自分の育ての親である竜を探しておる。しかし、ワシらは戦う力も無く、ギルドの外へ行くことも少ない。噂を聞いても、ウエンディに付いていける者がいないのじゃ。一人で行かせるには危険な場所であるこ

とも多く、今までも何度か見てみぬふりをせざるを得ないこともあった」

振り向けば、ウエンディちゃんは困ったような笑顔を僕に返してきた。

事情を追求するつもりは無いが、やはりこのギルドの人々は外界との接点をあまり持ちたくないらしい。

ウエンディちゃんもまだ一人で長旅させるには危険な年齢だ。そして、竜の情報というものは良くも悪くも注目されるため、悪用する輩も少なくない。もしこのギルドが外界との交流に積極的だったとしても、万が一の場合戦える魔法を持っていないというのはいささか危険だろう。

だから、か。

「ウエンディちゃんが親探しをする協力者がほしかった、というわけですか？」

「……すまない。都合のいいことを言っていることは自覚しておる」

たしかに、都合がいいかもしれない。

通常、護衛の依頼をすればそれなりの金額が発生する。僕の場合一応良心的な値段を心がけてきたが、それでも繰り返せばそれなりの金額になる。内容が内容だけに、足元を見るようなギルドや傭兵も少なくない。

織物や野菜の販売などをたまにしているという話だが、そんなちよっとしたものを売った金額では護衛を雇うのにかかる資金はそうそうたまらないだろう。

が、ギルドメンバーになってしまえば話は別だ。

身内ならば、依頼ではなく一緒に行こうというお願いですむのだ。もちろん身内中でも依頼といった形をとることもあるが、そこに莫大な金銭が発生することは無い。

「マスター……いきなりそんなこと言ったらクライスさんが困っちゃいますよ。クライスさんだって、私と同じで記憶を……自分の家族を探している途中なんですから」

「でもウェンディ、あなた自分で言ったけどあなた自身も探してるんでしょ？ こいつ、結構強いみたいだしここに入ってくれればいままでいけなかったような危険な場所や思い切った遠出もできるかもしれないわよ？」

「シャルルまで……」

言いながらも、彼女自身思うところはあるのか、声にはそこまで明確な否定は無い。

それはそうだろう。できることなら僕のように世界を旅してでも自分の両親を探したいというのが彼女の本音のはずだ。

そして何より、同じドラゴンスレイヤー、同じ経緯・経験をしている人間なら他の誰よりもこの御伽噺のような願いを聞いてやれるのだ。彼女の存在が僕の希望になったように、僕の存在もまた彼女の希望になりえるのかもしれない。

……よし。

「構いませんよ」

「え？」

意外そうなウェンディちゃんを一瞥し、マスターローバウルへと

僕は答える。

「ウエンディちゃんは僕に希望をくれました。その恩返しができるのなら、喜んで僕はここにいたいと思います。それに、ここのお茶、おいしいですね」

「おお、ここにいてくれるか。ありがとう、ふがないワシらの変わりに協力してやっておくれ」

「喜んで。こんな僕でよければ、よろしくお願いします、マスター  
ローバウル……いえ、マスター」

再び視線を向ければ、きょとんとした様子のウエンディちゃんの姿。見れば見るほど、幼く弱弱しい少女だ。

果たして、僕は子のこの希望になってあげられるのだろうか。僕よりずっと幼い時に竜を、両親を失ってしまったこの少女の希望に。今はまだわからない。

でも、どうせ目的がひとつしかなかった僕の旅。もうひとつくらい目標が増えたところで、どうってことはないさ。

「というわけで、今日から化猫の宿のケット・シェルトー一員になったシュヴィ・クライスだ。よろしく、ウエンディちゃん、シャルル」

「……本当に、いいんですか？　ここ、そんな大きなギルドでも有名なギルドでもないんですよ？」

「もちろん。どうせ7年旅しても情報なんてほとんど集まらなかったんだ、たまには気分を変えて、やり方を変えてみても罰は当たらない」

「……………」

「ウエンディ、こいつはいいやつよ。きっと何かを見つけられる、

そんな予感がするもの」

「シャルル……。うん」

自信なさげだった瞳を改めて、少女は僕をまっすぐ見つめ、云った。

「クライスさん。ありがとうございます。そして、よろしくお願ひします！」



「いったいどうゆうつもいなんだよ、マスター」

ウエンディが新たに仲間になった青年、シュヴィ・クライスにギルドを案内すると言ってシャルルと共に集会所を後にしてから数分後。ギルドメンバーのほとんどがそこに終結していた。

みな、困惑したような瞳をローバウルへと向けている。

「確かになんの情報も得られなかった滅竜魔導師、そして竜の情報をあの男が持ってきてくれたのは助かった。すっげえいいやつみただし、実力も相当だってことは俺でもわかった。でもよお……」

「そうですよ、マスター。彼は強い。でも、だからこそもし私たちの正体を感じられるようなことでもあれば……」

「ふむ……」

質問には答えず、静かに酒をあおるローバウル。

そのまま口から戻していたような老人の姿は、そこにはなかった。

「ワシらは、ここを離れることはできない。それは、ウエンデイにとって辛いことじゃ。あの子はしっかり者じゃ、皆の前では見せぬが、夜は一人で泣いておるのだ」

そんな痛々しい姿に見覚えがあるのだろう。メンバーたちは一様に気まずそうな表情を作る。

「ワシは、ワシらは……皆、あの子のことを大切にしているが、それだけではだめなのじゃ。あの子には、いつかワシらではない仲間が必要な時が来る。わしらには、償わねばならない罪がある」

静かな瞳は、どこか遠い世界を眺め。

それに、と。ローバウルは言う。

「ワシは、知っておるのだ。あの者が、いつかあの子を広い世界に導いてくれる。そんな人間であることを」

「白い竜の噂？」

僕が化猫ケット・シエルターの宿に入って一週間。

日常的に行っている植物の世話や売り物の管理、その他ギルド内の決まりや設備云々なども覚え、ようやくいろいろと落ち着いてきた今日きょうび。僕はウエンディちゃんとシャルル、その他数名のギルドメンバー先導のもと近くの町に生産物の販売に来ていた。

町、といっても外界との積極的な交流を好むわけではないケット・シエルターの交易相手。ぎりぎり集落や村といった規模よりは大きいといっただけだ。

前からもいろいろ売りには来ていたらしいが、なにぶん一回に運べる量が限られており、品質や完成度の評価は高かったものの量が少なくて行き渡らないといった事態がたびたび起こっていたらしい。今回は僕、文字通り人外の怪力を誇る人手がいたため満足な量を持つてくることができたと喜ばれたものだ。

基本的に戦闘による収入を主にしていた身からすれば、こうして売る側に回るとするのは初めての経験であり、なれない点多かったが大きな町にある商店などと違って割りとフレンドリーな対応で売買が行われているためそこまで気負うことも無くこなせた。

僕の着ている着物も人目を引くようで、あちらから話しかけてくるものが多く割とすんなり溶け込むことができたのだ。笠や羽織は纏っていないので怪しい姿にもなっていないし。

生産系ギルドに所属する以上、今後も戦闘よりはこういった商業者じみた日々を過ごし、派生した依頼を受けたりすることが多くな

るのだろうか。

まだ一週間だが、今までのように一日中歩いて各地を旅するような日常を過ごさなくなる以上毎日体を動かす必要も出てくるだろうか……。ウエンディちゃんによれば木を切ったり畑仕事をしたり割と体力を必要とする日もあるそうだが、戦闘に比べてしまうと少々物足りないだろう。

と、いろいろ考えながらも、種類も量も豊富なためウエンディちゃんいわくいつもよりたくさんの人がいるらしい今日の状況。その中、野菜の値引き交渉をしていたお客の一人が、白い竜の噂を聞いたというのだ。

「苦し紛れに使うにはなかなか思い切ったもの提示してくるねお客さん」

「いやいや、本当だって。たびたび竜の噂をお嬢さんが聞いている様だったから、お世話になってるし出かけついでいろいろ聞いてただけどさ、今回はそれを見て人に直接会ったんだよ」

「ふーん」

ちなみに僕は売り子ではない。金銭の管理・物品の名称・各個の値段・珍しいものの用途、計算はできるとはいえそれだけでは商売はできない。物品の移動や受け渡しを行いながら見て学んでいるのだ。

そんな中、ウエンディちゃんが困っているようだったので僕が横から口を出したのだ。

本来ならシャルルの役目だろうが、あの特徴的な生物は子供たちに大人気らしい。駆け回る子供たちからふよふと逃げ回る姿がちらほらと見えた。

「クライスさん、せっかくの情報なんですし、話だけでも聞いてみませんか？」

「竜の噂にはガセが多いが、そのガセすら少ない現状……。内容くらい聞いておいてもいい、か」

「お、じゃあこの野菜もう少しまけてもらっても……」

「内容次第だよ、お客さん」

「ぐ、お兄さん初めて見る顔だけど、ほかの人たちとはまた違った形でなかなか過保護だね」

客にはウエンディちゃんがガセネタに踊らされないよう、僕が横から口を挟んだと思っているのだろう。まさかそのお兄さんもドラゴンスレイヤーだとは思うまい。

もちろん、もろガセネタっぽい情報も少くないのでその面での心配があったことも確かだ。酷いときは昨日出てきた町が三日前にドラゴンに襲撃された、などといった即興にもほどがある話もあるのだ。

僕の移動速度が速く、本来なら移動に数日かかるところから次の町へ移動したりするので本人にしてみれば確認しようがないので適当でいいと思ったのだろうか。

「仕方ない、先に話すよ。俺がこの話を聞いたのは一週間ほど前だったかな、ちょうど行商からの帰りだった。真っ青な顔した若い男に馬車の荷台に乗せてくれて言われてな、そのとき道中の話で聞いたんだ」

「いきなり怪しい……」

「ま、まあ最後まで聞いておくれよ。それでその人は観光目的で旅を

してたそうなんだけど、体にいい温泉があるっていうササナキって町に行こうとしてたらしいんだ。その人はのんびりとした旅が好きだとか言ってる、森の奥にあるっていうその町に徒歩で向かってたそうなんだが、そのとき見たんだってさ辺りにある木々なんか比喩物にならないくらい巨大で真っ白な竜の姿を」

まるで怪談話でもするかのようになり、話の要所要所に緩急をつけてしゃべる男性客。

しかし、それだけきくとどう考えても……。

「それ、ワイバーンとかじゃなかったんですか？」

おっと、僕の思考をウエンディちゃんが先読みしたように代弁してくれた。

よく考えなくてもその話の落ちはそんなものだろうと、子供でも予想できるたのだろう。

ワイバーン。二本の足と巨大な翼を持ったモンスターの総称だ。ドラゴンとの違いは多いがわかりやすいのは足の数であり、二本足と巨大な翼をもつのがワイバーン、竜は四本足に翼だと云われている。他にも体格に大きな違いがあり、ワイバーンは推定五メートルから大きくても十メートル弱。ドラゴン、グランディーネはウエンディちゃん曰く三十メートルは超えていたらしい。

というか、むしろ竜とは巨大なワイバーンを昔の人間が竜として扱っていたのではないかといわれている。御伽噺の竜ほどワイバーンとは強力無比な生命体ではないが、魔法技術の発展が今ほど進んでいなかった古の人間たちからしてみれば、通常個体の数倍もあるようなワイバーンは、竜のような絶対存在に見えたのかもしれない。

ワイバーンとの戦闘経験はあるが、どれも楽勝ではないが苦戦はしない、程度のものであった。もちろんそれは僕がドラゴンをも討ち滅ぼせるといわれる滅竜魔法の使い手であったからで、通常のギルドへの依頼があった場合はそれなりの依頼料が発生する大規模なものとなるらしい。巨体である、それだけでも人にしてみれば十分な脅威であり、畏怖の対象なのだ。

故に、僕がドラゴンの情報だーといわれていった先には高確率で実際はワイバーンでした、という落ちが多い。

「いやいや、これはマジな噂だって思うよ。なんてたってその白いドラゴンは魔法を使っただって話だ」

「魔法を？」

「そう、何でも森の一部を一瞬で雪景色に変えちゃったらしい」

魔法を使用するワイバーン。確かに聞いたことの無い話だった。

ワイバーン種はさまざまなものが存在し、ワイバーンという同じ種族でありながら住んでいる地域にも大きな差が出るほどだ。暑いところが好きな種類、寒いところが好きな種類、水辺を好む種類、たとえを出せばきりがない。

そして、大体彼らは好んだ地域に類似した能力を持っていることが多い。

ブレスだったり、屈強な外皮だったり、熱に強い寒さに強い。中には主要都市の騎士が着込む鎧の素材として使用されるほどの種ま

でいる。

だが、あくまでそれは能力であって魔法ではない。ワイバーンは魔法を使う種族ではないのだ。

「それが魔法であるという確証は？」

「魔方陣の展開、それとその旅人さんも魔法を感じ取れる程度には魔力を持ってたらしい。並みの魔力じゃなかったそうさ。俺の馬車に会ったのはそこから逃げ帰ってきたときらしいからな」

「足の数とか、詳しい大きさとかは話していませんでしたか？ その旅人さん」

「逃げるのに必死だったらしいからねえ、そこまで詳しくは見ていられなかったそうだよ。折角遠出してきたのに、ってばやいてたよ」

うーむ。

巨大な体躯、だが厳密な容姿までは不明、見たのも一瞬。

これだけならガセネタと決定づけて無視しても良かったが、魔法という単語には少々気になるものがある。

魔法を使う巨体。バルカン（巨大なサルのような容姿をしたモンスター）など、魔法を使うモンスターは存在してはいるが、決してその数は多くない。

人間ですら魔法を使えるというのは特別に分類される。そんな力を持つモンスター、それが危険か危険でないかなどいうまでもない。もちろん友好的なモンスターも存在しているので一概には言えないが。

もしそのドラゴンの正体がワイバーンだったとして、それでも魔法を使うのならばそれだけでも見る価値はあるかもしれない。

ウエンディちゃんは……

「……………」

考え込んでいるようだ。が、どこかそわそわしているようにも感

じる。

僕という存在を見つけてからまだ一週間。人間という生き物は現金なもので、一回いいことが起きるとそれが続くような、そんな何の根拠もない期待を抱いてしまうものだ。

僕自身、珍しいワイバーンなら見てみる価値も云々などとは言っても、正直ウェンディちゃんという自分の記憶を正しいものと証明してくれた少女との出会いでこの程度の情報にも興味心身なのは確かだ。

行ってみるのも、いいかもしれない。

「お客さん、もっと詳しい話聞いてもいいですか」

と、僕が言うと客はにやっと笑い、

「じゃあ、値下げ交渉受けてもらってもいいかね？」

……本当、人間とは現金な生き物だ。

ちなみに、さすが行商しているだけあり情報の件も含めそれなりにいい値段を値引かれ、ウェンディちゃんと僕が軽く怒られたのは余談である。

「なぶら、ならば明日にでも行ってくるといい」

その日の夜。夕食を終え、ウェンディちゃんとシャルルを引き連れ昼間の件を進言したところ、特に洩った様子もなくいつものように危うげに酒を煽りながらマスターは平然とそう言った。

拒絶されることは無いと思っていたがまさかこうもあっさりと許

可が出るとは思っていなかった。

集落とはいえ一応ギルドという組織である以上面倒な手続きやら申請やらを覚悟していたのだが。

ギルドに所属するのが初めてな以上、身内の個人的な用事にどういった措置が取られるのかは知らないが、これはゆるすぎるのではないだろうか。

「や、やけに簡単に許可してくれるのですねマスター。しかも明日って……ギルド内での僕やウエンディちゃんの役割なんかもあるんですから」

「構わん、このギルドに急ぎの用、などというものは基本無いに等しい。それよりはせっかくの貴重な情報、それも多少の遠出の必要があるとなれば急いで損はなからう」

だろう、といわれると僕やウエンディちゃんは頷くしかない。

僕は今までなら特に気にすることもなく今回のような場合ならばその日のうちにそのササナキという町に赴き事の真相を確かめていただろうし、ウエンディちゃんは自分の親探しに協力してくれる人物が先日入団した矢先なのだから同じくすぐにでも赴きたいといった様子。

ギルドの仲間たちの中で特にウエンディちゃんといえる時間が長く保護者のような立場のシャルル（年齢は大分下らしい）も、昼間の話を聞いてからしつこく詳細を尋ねていたし聞くまでも無いだろう。

「それに、少々気になることもあるのだ」

「気になること？」

傾けていた酒を置き、しっかりと飲み込んだマスターが少し真剣な目でポツリと呟く。

ウェンディちゃんは聞き返していたが、正直言って僕もササナキという町の詳細を聞いた辺りで少々気になっていることがあった。

「先日、シュヴィイが撃退したというウォードッグ。あれからこのあたりには出沒しなくなったが、確かあのモンスターの天敵はワイバーンだったはず。もしかしたら関係があるやもしれぬ」

言われ、そういえばそんなこともあったなと思い出す。

別にこのギルドに所属するきっかけともなったことを忘れていたわけではないが、この一週間環境が激変したせいで忘れしていたのだ。

マスターの言うとおり、あれからウォードッグによる被害は出ていない。近隣の村などに赴いたさいにも一時期おびえる日々が続いたが一週間前から目撃報告すらないとか。

しかし、個体数から考えればあれは群れ二つ程度。もしドラゴンの招待がワイバーンだとしたらその影響で他の群れもこちらに向かって降りてくるかもしれない。

「もちろん、あくまで気になるだけ。関連性があり、もし戦闘になるようであれば気をつけるよう……それだけにすぎん。シュヴィイ、おぬしの力を信用しないわけではないが……」

「わかっています。先日は仕方なかったとはいえ、ウェンディちゃんもまだ子供。あまり刺激の強い光景は見せたくないのは僕も同意します」

「マスター、それにクライスさんまで……。私そんなに子供じゃ」

「子供はみんなそう言うのよ、ウェンディ」

「うう……」

それを言うならお前はどうかんだシャルル、などという感想を持たないでもなかったが、動物は人間と歳の取り方が違うというし一応黙っておく。

そんなやり取りも挟みながら、マスター、及び数名の仲間たちに事情を話し予定を決定する頃には少々遅い時間となっており、ウェンディちゃんのおくびをきっかけに、そろそろいいだろうと話はずとまった。

よし、と。明日の畑仕事や織物などの販売と一緒に行く予定だった、初日以降いろいろ助けてもらっているペテルさんや他の仲間たちを見渡し、改めて予定を確認する。

「ではマスター。お言葉に甘えての明日の正午前に発とう思います、ウェンディちゃんにシャルルもそれでいいんだよね？」

「はい、ササナキは泊まるころもあるそうなので持ち物は着替えくらいですし準備もそんなにかからないと思います」

「私も大丈夫、それこそ服くらいしかないもの」

「了解。僕も旅をしていた身、その辺は大丈夫だ。あー、とはいえペテルさんたちには悪いな。明日も他の町に織物とかを運ぶ予定だったのに」

「大丈夫。あなたよりは多少頼りないけど、他の力自慢に頼むから。あなたはウェンディのことを頼むわね」

「もちろん、そこは心配しなくても大丈夫。護衛の仕事をしたことは少なくない」

彼女が僕の希望となったように、僕も彼女に希望を与える恩返しをする。それが僕がここにいる理由の一つでもあるのだ。

大げさですよ、と困ったように笑うウェンディちゃんと、そうじゃないと困るわよ、と僕を指差すシャルル。

今後、僕がこのギルドを離れる日が来るとしても、それまではこの二人を守るのが僕の役目なのだから。

・  
・  
・

「ごめんなさい、クライスさん……」

「いや、僕こそごめん。ウェンディちゃん……」

次の日、僕は早速自分の役目を果たせないでいた。

予定通り数日滞在できる荷物を持ち午前中のうちにギルドを発った僕たちは、電車に揺られること一時間弱、ササナキ近辺の駅に降り立った。

遠出は久々らしく目をきらきらさせるウェンディちゃんたちと駅で昼食を取り、その後ササナキまでの詳細な道筋がのっている地図をそのまま駅の売店で探したところ、店員曰くなんと売り物の地図は無いのだという。

何でもササナキは町といいながらそれほど大きなものではなく、しかも山の中に存在しているのだという。

所謂知る人ぞ知る秘湯というものらしく、僕やウェンディちゃんのような若い人間が知っていることも結構珍しいのだとか。

とはいえ自分で探し出さなければならぬ、なんて商売上がった  
りなことをしているわけではなく、おおよその位置は伝聞で聞くこと  
はできたし簡易地図もササナキへと続く山道の入り口に設置してあ  
った。

と、そこで問題になったのが、目的地は結構山奥らしく、それな  
りに道になっているとはいえ山道は荒いことに変わりはないことだ。  
僕は言うまでもなく、飛べるシャルルも特にその辺は気にする必要  
は無かったが、ウエンディちゃんは別である。

ササナキが電車やバスで行ける場所には無いという話は聞いてお  
り、ウエンディちゃんも流石に普段好んで着ているワンピースでは  
なくズボンと歩きやすい靴を着用しているが、子供の足には少々き  
つそうな道であることに違いは無い。

ちなみに僕はいつもどおり和服を纏っている。歩きづらいじゃ、  
と心配されたが何年も似たような姿で旅を続けた身にそれは野暮と  
いうものだといえ、あっさり納得してくれた。

僕がおんぶする、シャルルと一緒に飛ぶ、などの提案はもちろん  
でたのだが昨日子供がどうのと言われたのが少々気になったのか、  
頑なに大丈夫と繰り返し結局足場の注意と旅の経験による地形把握  
力の高さから僕が先頭、続いてウエンディちゃん、そして彼女がこ  
けた時のためにシャルルが最後尾、ということを決着がついた。

危ない足場は僕が注意しシャルルのささえもあり途中までは問題  
なかったのだが……。

「よりによって数少ない平らな道で転ぶなんて、あいかわずね。ウ  
エンディは」

「うう、ごめんなさい」

そう、数々の危険な場所をなんとか乗り越え平らな道に差し掛かり一息つけるな、と気を緩めた瞬間特につっかかりがあるわけでもなく、すべるわけでもない平らな道で、いきなりウエンディちゃんがスッ転んだのだ。

戦闘中でも滅多にしないような反射で手を伸ばしたが、気を抜いてしまったのがいけなかった。

できたのは膝から落ち、そのまま顔面を叩きつけそうだったところをなんとかささえただけで、下半身……詳しく明記するなら膝にちょっとした擦り傷ができてしまった。

大怪我ではなかったとはいえ、守るといふ役目を早速果たせず、ウエンディちゃんには本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「いやいや、僕が気を抜いたのがいけなかった。まさか平地で転ぶとは思わなくて……」

「あんまり言わないでください、はずかしい……です」

「ご、ごめん。幸いササナキの温泉は傷にもいって聞くと、できるだけ急ごうか」

ちなみに、今ウエンディちゃんは僕が背負っている。

最初はシャルルと飛ぶほうがいいのではとも考えたが、ふよふよと浮かぶ飛び方は傷に触るのでは、ということと第二候補だったおんぶが適用された。

少々不謹慎ではあるが、正直この状況はけして悪くは無い。

言っただけが悪いがウエンディちゃんの歩幅では時間がかかることは避けられず、僕が背負っていけば傷に響かないよう静かに歩いたとしても大分ペースは速いのだ。

別に一刻をあらそうわけではないが、すでに15時は過ぎている。

まだまだ暗くはならないが早めについて損はないだろう。それに、天候もあまりよくない。

「温泉、秘湯って言ってたわよね？ ササナキがそこまで有名ではないとはいっても、本当に人を見かけないわね」

「ん、それはしかたないんじゃないか？ 一般人ならあんな噂聞いたら恐ろしくもなるだろう」

「……山の中に雪の魔法を使い人を襲うドラゴンがいる、でしたよね」

ウエンディちゃんが要約した噂の内容に、僕とシャルルが揃ってうなづく。

竜の噂は、大分広がっていた。駅周辺、及びその近隣の人々からササナキの話を聞けば三人に一人はあの山には最近ドラゴンがいる、という噂話を持ち出していた。

話を詳しく聞けば、噂自体は数ヶ月前からあったが最初はありえないと誰しも聞く耳を持たなかったらしい。だが、だんだんとただでさえ少ない旅行者の姿が少なくなり、もしかして本当に？ と少しずつ広がっているらしい。

ササナキから買出しに来る人間もいるそうだが、問い詰めていない知らないとはぐらかされるのだという。

「ドラゴンの噂は人を惹きつける……じゃなかったの？ クライス、あなたが引っかけたてきた噂もこんなものだったのかしら？」

「いや、正直あまり経験のないタイプだ。最初はそのササナキって町が集客のために流した噂かと疑った、雪の降る寒い場所なら温泉はもっといいものになるだろうしね。だが、人を襲うってのはいく

ら尾ひれがついたといってもおかしい。別にライバルがいるなんて話もないし」

「噂に騙されてわざわざ行った客が騙された逆恨みに、なんて可能性は？」

「んー、まあありえなくはないが……。そもそも噂の出所がササナキかもわからないのに、逆恨みで後付して流したにしては全員が襲われそうになったというのを前提に恐ろしそうに語るというのはなんだかな」

正直、信憑性という面で言えばこれだけいろんな人物が噂を知っているというのは確実なものになるのでありがたい。

が、人を襲うというのはきな臭い。

もちろん僕やウエンディちゃんを育てたドラゴンがたまたま心優しく人間に対して好意的だっただけ、という可能性もある。

幸い誰かが食い殺された、という話は聞かなかったが万が一の可能性も考えておいたほうがいいかもしれない。

「そのドラゴン、怖いドラゴンなのかな……。お話、聞かせてくれるでしょうか」

「わからない。けど、悪い方向に考えておいたほうがいいかもしれない。そもそもドラゴンでない可能性のがずっと高いんだから」  
「そう、ですね……」

ドラゴンではないかもしれない、ドラゴンでない可能性のが限りなく高い。そんなことは僕に言われるまでもなくわかっているはずだ。それでも期待せずにはいられない、そんな様子だ。

ここ一週間ほどそれなりに係わりをもって接し、この少女が年齢

の割りに随分しっかりものだという印象が強くなった。

それでも子供は子供。母親思いきり甘えたい年頃だろう。

親に会いたい。そのためにはたとえ今まで何度ガセネタに騙されたのだとしてもわずかな希望に縋るしかないのだから。

僕は記憶がないからか、それとも自分で思っているよりそっけない性格なのだろうか。あまり親に会い甘えてみたい、会ってみたいという感覚は感じたことがなかった。それしか目的がなかったから、という感じだ。そもそも子供子供と言ってはいるが正直自分の正確な年齢はわからないのだから、もしかしたら背がでかいだけで僕自身まだ子供かもしれないのだ。

親の顔を覚えていない僕と、幼くして親と離れてしまったウエンディちゃんのどちらのが必死かといえは、当然この子のほうだろう。今回の噂が真実であることを心から願ってしまうのは、今までのように自分のためだけではなく必死なこの少女と一緒にいるからだろうか？

誰かの頼みで動いたことはあっても、誰かのために動いたのは記憶の中で今回が初めてだ。まだ、この思考の答えはわからないが、いつかわかる日が来るのだろうか……。

「あ、もしかしてあれかしら。見えてきたわよ！」

暗い空気のまま黙ってしまった僕とウエンディちゃんを心配するか、シャルルが少しオーバーな様子で遠方に見え始めたササナキとおほ思しき建物の集合を指差す。

一本道を辿ってきたのだ、ササナキであることは間違いないだろう。

「あ、本当だ。温泉の匂いが空気に混ざってる……」  
「結局、道中でそのドラゴンを見かけることはなかったわね。それらしきものも見なかったし」

シャルルの言うとおり、昨日聞いた話では向かう道中で見かけたというものだったのでいけばいいな、などと期待していてもなかった。まあ、道中ウエンディちゃんが負傷したことで期待は危惧に変化したのだが。

というのも、ササナキの住人は噂についてあまり語りたがらないらしいからだ。一応聞き込みはしてみるつもりだが、自分の足で森を走り回り探す覚悟をしておいた方がいいかもしれない。

肉眼で確認できてからは早いもので、数分後には入り口が見えてきた。秘湯とはいえ一応観光地として派手に飾られていたのでわかりやすいものだった。

流石に人目の多い場所でおんぶは恥ずかしいとごねたウエンディちゃんを仕方なく下ろし、ササナキへと足を踏み入れると、暖かな空気と共に温泉特有の匂いが感じられ、同時に人のざわめきも感じられた。

しかし、

「なんだか、町全体の雰囲気暗いような……」

「ああ、ウエンディちゃんでも感じるか。観光地にしては、活気とかそういういったものがあまりないように感じる」

「はい……なんだか町の皆さんの顔も少しやつれているような気がします」

まばらだが、観光に来ている人間はそれなりにいて、お土産屋な

どで店員と会話している姿も見受けられる。

いらっしゃいませー、と気前のよさそうな男の声。ようこそササナキへ、と耳当たりのいい女性の声。

だが、それらにはなんとというか……生気がない、というのだろうか。やる気がないとか元気がないとかそう言った感じではなく、むしろそれらがある上でやつれたような様子であるため町全体がなんだか妙な雰囲気をかもしていた。

「これは本格的にきな臭いな……、ドラゴンに以前に何かあるんじゃないかこの町」

「何かって何よ」

「んー、たとえば後ろめたいことをやってるとか、ドラゴンに生贄を要求されてるとか……」

「い、生贄!？」

「冗談だよウェンディちゃん。それくらい、妙な様子ってことだ」

冗談。そう、冗談だといいたけど。さっきからちらちらと町の人間に混ざって感じる決して好意的ではない視線とかが。

なにかある、それは確実だろう。観光地にはあるまじき排他的なこの視線、監視するようなこの感覚が気のせいであるとは思えない。一人旅をしていけばいろいろある、ちょっと目を離れた際に荷物を奪われたり、野宿のさいにモンスターなどから感じる殺気まで。

そんな経験から培われた僕つちかの感覚が、何かあると告げているのだ。

「二人とも、一応ギルドマークを隠しておこう」

「え？ 一応今は私もシャルルも服の下に隠れますけど……どうしてですか？」

「説明は難しいけど、しいて言えば勘かな。旅をしてきた中で培われた、ね」

僕が割りと危険なこともしたことがある、というのは出会った日にドラゴンの情報と一緒に旅の話題が出たときに二人に教えてある。そんな僕の経験を踏まえての発言、二人は何も言わず頷いてくれた。

その後、マスターたちへのお土産と情報収集を踏まえ出店に何度か足を踏み入れたのだが、どうにもドラゴンの話になると居心地の悪そうな顔をする者がほとんどで、答えてくれたとしても素っ気無い様子を装って知らない、といわれるばかりだった。

「やっぱり噂の通りでしたね」

「ああ、やっぱりここの住民から口頭で情報を得るのは難しい、か」  
「なによもう、どいつもこいつも話をそらして！ 知らないわけがないじゃない」

「シャルル、声が大きいよ」

「だって……」

結局辺りが暗くなるまでさりげなく情報収集を続けたが結果は変わらずじま이었다。噂が嘘だった、という結論に至ったのならともかく、下手にごまかすせいでむしろさらに疑わしくなっていくと同時に、それを追求しても誰からも答えを得られないという状況がもやもやとした気持ちを増幅させていた。

僕らが魔導師ギルドの人間であり、僕だけならそれなりに危険な任務についても問題ないことを明かしササナキの住人がなにかやましいことがあるのではないか、といったように脅す方法もある。あ

れだけあからさまな様子なのだ、多少荒いことをすれば何か得られるものはあるはずだ。

今までならそうした方法もありだったが、今は子供の前。けして好意的ではない方法は取るべきではないだろう。

それに、所々で感じる視線にも気を配る必要がある。あまり目立つ方法、目に付く方法は僕だけではなく共に行動しているウェンディちゃんたちにまでなにか危害が及ぶ可能性がある。得られるものがないとしても、この子達にまで危険が及ぶのは避けたい。

「仕方ない、今日はそろそろ宿を取って明日に備えよう。一応マスターは一週間弱くらいなら滞在して調べてきていいって言ってくれたんだし。それに、ウェンディちゃんもそろそろ歩くのきついだろう？」

「うっ……はい。歩けないってほどじゃないですけど……」

「情けないわね、もう」

「ごめんなさい……」

「すぐ謝らない！」

「あー、ほら。見えてきたぞ、今日はあの宿に止まろう、な！」

基本弱気で腰の低いウェンディちゃんと、強気で自分の意見をハキハキと発言するシャルル。

性格の正反対な彼女たちの衝突は、ドラゴンの話題になっては凹んで微妙な空気になってしまう僕とウェンディちゃんのやり取りよりよっぽど頻度が多い。

もちろん喧嘩するようなことはなくすぐ普通に会話する程度なもので問題になったことはない。だが、年頃の少女とはこれほど弱気なものなのだろうか。

閑話休題。

僕が咄嗟に指差したのは自分の着用している和服と同じ東方の文化を取り込んだ落ち着きのある宿だった。

ササナキの名に反さず小さな池と笹に飾られた入り口をどうにか気を沈めた二人を先導して潜れば、予想通りというべきか和服に身を包んだ旅館の人間が迎えてくれた。

その目はやはりどこかやつれたような様子だったが、今更それに対して何を言ったところで無駄なので知らないふりをして受付に直行する。

「ようこそササナキへ。ご宿泊をご希望でしょうか？」

礼儀正しく腰を折りながら僕へと笑顔を向けた女性は、流石に受付の人間。他の住人に比べれば影の少ない瞳をしていた。

僕たちの年齢に少々驚いたようだったが、特に気にした様子もなかった。

適当なボロ宿に止まることの多かった旅の道中、こうした礼儀のなった受付が珍しい僕のほうが逆に言葉に詰まりそうになったほどだ。

受付に肯定の意を返そうとうなずき、そこでそういえばと思いついたことがあった。

「ええ。僕とこの子、あとシャ……猫、動物ってここ構いませんか？」

「はい、問題ありませんよ。ですが、温泉のほうへ連れて行くことだけはご遠慮いただくことになっておりますが……」

「あー、それはここ以外の宿でも同じですかね」

「申し訳ありませんが、いろいろなお客様がご利用されますので……」

…」

やはり。

思いついたことその一。シャルルの存在だ。喋って二足であるいて魔法で飛ぶとしても、シャルルの見た目はどうしたって猫である。不特定多数の人間が見つかる温泉という場所で動物も一緒に、というのはやはり難しいことのようなのだ。

「シャルル、温泉は入れないらしいがどうする」

「……いいわよ、別に。汗をかくほど疲れたわけじゃないもの、体を拭く水道でもあれば」

と、いうものの。その顔はどう見ても何で入れないのよー、と叫びだす一歩手前だ。しかし自らの見た目はしっかり自覚しているため理性が勝っているといったところか。

「猫がしゃべっ……あ、いえ。お値段は多少上がってしまいましたが、一応簡易な湯船の付いたお部屋もご用意できます」

先ほどの情報収集の合間合間にも何度か見た反応をなんとか押し殺しつつ、受付の女性がそう付け足してくれた。

喋るモンスターや人間以外の生物は少ないとはいえ、一般の人間にもそれなりに認知されている。とはいえ猫のような見た目をした種類は一般的には知られていないため、当然唾然とされる。

しかもウエンディちゃんの話によれば卵から生まれたのだとか。正直僕も未だにシャルルがどんな生物なのかはわからずじまいである。

「じゃあそこで。っと、その前に」

はい、といいかけた受付の女性に手で静止を求め僕はウェンディちゃんに振り向く。

「なあ、部屋どうしよう。二つとろうか？」

「え？」

「あ」

二人にだけ聞こえるようにささやいた台詞に、二人は正反対の反応を示した。

ウェンディちゃんは何故そんなことを聞くのか、といった疑問の声。シャルルはそういえばうっかりしていた、という焦りの声。

化猫の宿では僕たちは一応同じ屋根の元暮らしている。

とはいえそれは長屋で複数の部屋に分かれており、食事時などはともかく決してプライベートや寝室まで同じというわけではない。思いついたことその二。子供とはいえ、女の子だ。男性と同じ部屋というものに抵抗を感じる可能性もある。

「んー、同じお部屋で大丈夫ですよ？ クライスさんですし」

「いいのか？」

「はい」

予想に反しなんでもない、というようにうなづくウェンディちゃん。

クライスさんですし、とはいどういうことだろうか。同じドラゴ

ンスレイヤーとして信用してくれているということか、それとも僕が気にしすぎなのか。シャルルがいるから、という可能性もある。もしくは普段大人ばかりのギルドに身を置いているおかげで他人と過ごす、という状況にあまり抵抗がないのか。

なににせよ、本人が気にしていないようなら問題はない。別に部屋を複数取るくらいの所持金はあったが、一部屋でいいならそれに越したことはない。浮いたお金でお土産を多めに買うのもいいだろう。

……いや、まだ問題はあった。

保護者的存在であるシャルルだ。彼女も反応を見るに僕と同じように気にしている様子。

唸るシャルル。しかしすぐに息を吐いて首を振った。

「ウエンディが気にしないなら構わないわ。この子と同じ過去を持つてるあなたのことを信用してるから」

どちらかというど釘をさすような言い方だったが、同じく問題ないらしい。

自分で提案したとはいえ同室であることに許可をもらえたことは幸いだ。

情報収集中に感じたあの視線。ここの妙な雰囲気。

一応目立たないよう行動したつもりだが、よく考えればシャルルがすでに目立っているし、ササナキの住人がドラゴンに関連した話題を探っているものがいたら報告するように言われている可能性もある。

もちろん僕の考えすぎですべては妄想で終わる可能性もあるのだが、どちらにせよドラゴンの噂があるところにあるのはあっけない

結末あるいは……何者かの陰謀であることも少くないのだから。夜、なにかあった場合など同じ部屋であるほうが対処がしやすいのは道理だ。

「了解。あ、すみません。じゃあその湯船つきの部屋でお願いします。とりあえず一泊で」

「ありがとうございます。お食事はどうなさいますか？ 一泊でしたら夕食と朝食がご用意できますが」

「じゃあ、お願いします」

「かしこまりました。ではお値段のほうはこちらになります」

……………。

「どうかしましたか？ クライスさん」

「い、いや。なんでもないよ。すみません、これをお願いします」

秘湯ササナキ。その雰囲気はどうであれ結構いい値段、するんだな……………。



ササナキに複数ある宿の一つ〔紅葉〕。東方の文化を多数取り込んだその宿は、ササナキを知る者に特に好まれる宿だった。

木材を中心に使用し建築された建物は、建てられてからそれなりの年月がたった今でも森の中にいるような木々の香りが残り、宿の中を歩くだけで心身の疲れが取れるようなリラックスメディア空間になっている。

その効果が特に顕著なのは、当然というべきか天然の物をそのまま使用している温泉がある入浴場だ。サウナと何の変哲もない湯船だけという非常にシンプルな作りでありながら人気は高い。

にもかかわらず、今現在そこに人の影はほぼない。

開放されていないわけではなく、宿泊客がいないというわけでもない。単純に入浴には少し早い時間であることと、もう一つとある噂が原因で宿泊客の数が少ないのが原因となっていた。

そんな中、ガラスを一枚隔てた外。所謂露天風呂のある場所に一人の少女がいた。

一人で温泉にいるには少々幼すぎるようにも見えたが、それは右肩に刻まれた猫のようなマーク、ギルドに所属する者の証であるギルドエンブレムを見れば大抵の人間が指摘することをやめるだろう。

そんな少女は藍色の長髪をタオルでまとめ、幼い四肢を手持ちのタオルで隠しながら少々おどおどした様子で、そこまで熱くないはずの湯船に片足をゆっくりと浸けようとしている。

「いたっ！」

しかし、その努力は報われなかったらしい。

湯船に浸けた足にピリツとした痛みが走り、ウエンディ・マーベルは小さな悲鳴をあげた。

それはここに来る道中に転んだときすりむいてしまった膝の怪我からきたもので、湯船に完全に体を沈めてなお地味な痛みは続き、せっかくの温泉をすっきりと楽しめないわが身を少しだけ恨めしく感じえしまうのは仕方ないことだろう。

「はぁー……気持ちいい……」

とはいえ、深く息を吐きながら全身を弛緩させ、気兼ねなく裸体を湯船の中で広げてみても誰からも文句を言われぬ、いわば独り占めの状況はなかなか好ましいものだった。

今の時刻は十九時を過ぎたあたりだろうか。普段の生活リズムから考えれば入浴には少々早い時間である。

だが、チェックインしてまず何をするかと話題になったところ、先に入浴して体の汚れや疲れを落としてから考えようという話になったのだ。

ウェンディとしても確かに道中の山道はきついものがあり、普段から体を動かすことが多いとはいえ流石に怪我に関係なく疲労で足が少し痛むほどだったのでゆっくり湯につかって体を休めるというのは魅力的で、反論する必要もなかったので二つ返事で承したのだ。

浴場に付くと案の定というべきか人はおらず、一瞬まだ入浴できないのではないかと焦ったが宿の人間が大丈夫だと言っていたのと、ここまで一緒に訪れている人物、シュヴィ・クライスが平然と男湯の暖簾のれんを潜って行ってしまったので戻るわけにも行かなかったのだ。普段であれば友人であるシャルルが先導してくれるのだが、彼女は人間ではないため浴場へ来ることを許可されず今頃部屋に備え付けられた簡易浴場で入浴しているはずだ。

結果的に一人きりで広々とした温泉に一人で入ることになってしまったウェンディ。広々とした浴場は人がいないと少々恐ろしく感じ、早々と体を洗い終わると比較的コンパクトにまとまっている露天風呂へと足を運んだのだ。

そんな経緯はあったが、一度湯につかってしまえばそんなことはどこかへとんでいってしまった。

湯船の縁に頭を寄せ、空を見上げる。あいにくの曇天であったが、ここまで広い湯船につかることは初めてなだけに気にはならなかった。

「シャルルには悪いことしちゃったなあ……」

部屋を確認した限りではそれなりにいい作りではあったが、やはりこの広々とした浴場に比べてしまうと見劣りしてしまう。

ここへ来た理由はあくまでドラゴンの噂の真相を確かめるためであり、観光ではなかったことや来ることが急に決まったためそのまま気を回していなかったのだ。

「いままでこんなことなかったもんね……こんな風に噂をおってこんなところまで、なんて……」

普段ならほぼ必ず横にいるシャルルがいない完全に一人であるこの状況に、ふつつつと最近の出来事が頭の中を巡り始める。

今までなら、多分今回のような噂は唇を噛んで聞き流すしかなかっただろう。

けれど、今ウエンディはここにいる。

なぜなら今同じく温泉に入っているであろう人物、シュヴィークライスとの出会いがあったからだ。

一週間前森の中で自分の命を救ってくれた、そして自分と同じくドラゴンに育てられたというドラゴンスレイヤーの青年。

骨格を刃に変化させたり、金属すら弾くような肉体強化をほどこしたり、明らかに通常の魔法では実現し得ない魔法を実演され自分がドラゴンスレイヤーだと名乗った彼との出会いによる興奮は今で

も思い出せる。

残念ながら彼も親であるドラゴンの行方を知らず、それどころか記憶すら失っていると聞いたときは正直落胆してしまった。

考え直せば唯一の記憶であるドラゴンが嘘扱いされる世の中においてそれはどれだけ不安になることだったかは想像に難くない。そんな彼にがっかりするというのは失礼なことだ。

しかし、その出会いはそれだけで終わらなかった。

なぜなら彼がウエンディの所属するギルドケット・シェルター化猫の宿に所属し、さらには自分の親探しを手伝ってくれるとってくれたのだ。

彼はウエンディの存在が自分に希望を与えてくれた、だから恩返しをしたいと思います。

そして、早速こんな場所まで着いて来てくれた。

まだ今回の噂が真実とも虚偽ともつかない状況ではあるが、見なかったふり聞かなかったふりをしなくていい、さらにはそれを追うことができることがこれほど嬉しいとは思わなかった。

「ふふ……」

自然と笑みがこぼれた。

ずっと、ドラゴンスレイヤーは自分だけだと思っていた日々が終わった。グランディーネ、自分の母親の手がかりはまだ見つからないけど……一人きりじゃない、それが嬉しくて。

そのとき。

「あの……」

「え？」

曇天を眺めながらぼーっと空を眺めていたからだろうか、視界の外から響いた声に必要な以上に驚いて湯を跳ね上げながらウエンディは声のした方向へ向き直った。

そこにいたのは二十歳を迎えたかどうかの若い女性だった。

ウエンディは、観光に来ていた人間が湯船でだらんとしている自分を見て心配で声をかけたのかと思った。

しかしよく見れば女性は数時間前の情報収集のさい見かけたあの生気のないやつれた目をしていて、ササナキの住人だとウエンディでもわかった。

ここに住む人間全員が常に湯屋で働き客を向かえる側にだけ立っているわけではない、当然ササナキの住人がササナキの温泉を利用することもあるだろう。

「あなた、もしかして魔導師ギルドの方ですか？」

だが、続いた言葉にウエンディは背筋が凍るような感覚に襲われた。

うっかりしていた、今女性が入ってきた出入り口からは裸であるウエンディの右肩にあるギルドエンブレムが丸見えになっていた。

魔導師の証を隠していたのはあくまで念のためであり、万が一のことを考えてとクライスが提案したことだ。

だが、いくらギルドエンブレムが見えたとはいえそれをわざわざ指摘する理由が一般人にあるだろうか。

魔導師は確かに珍しい存在ではあったが、わざわざ声をかけて指摘されるほどのものではない。

ウエンディの見た目が幼いためという可能性もあったが、ほかならぬクライスの指摘があった後。悪い方向に考えてしまうのは仕方

がなかった。

「そう、なんですね？」

「……………」

ウェンディが答えずにいると、女性は何を考えてか若干早足になってこちらに近づいてきた。

どうしようーウェンディは咄嗟に身構えた。

大声で呼べば、もしかしたらクライスが気づいてこちらに駆けつけてくれるかもしれない。女湯だとか裸だとかそんなことはこの際関係ないだろう。

だが、本当にこの女性が自分をどうこうするかどうかの確証はない。勘違いだった場合問題になるだろう。

かといって何かされてから助けを呼べる確証もまた無い。

思考がぐるぐると頭を駆け巡っている間に、女性はすでにウェンディの目の前にいた。

そして、エンブレムのあるウェンディの右手を両手で包むように取る。

確証は無い、けれどこのままでは何をされるかわからない。

ウェンディは叫ぼうと息を吸い込み……

「魔導師様、私たちを助けてください……………」

「心え!？」

予想外の女性の言葉に、大き目の声で妙な返事をしたのだった。

「ご馳走さまでした、珍しい料理でしたけどおいしかったです」

ササナキの宿〔紅葉〕。

ここで出される食事は、やはりというべきか和食であり、山の幸をふんだんに使った朝食らしくシンプルな山菜料理だった。

昨晚の肉料理なども加わった色とりどりの料理も思わず舌鼓を打つものだったが、今朝もまた普段味わえないすばらしいもので、明日から舌が肥えてしまわないか心配になるほどだ。

「……………」

回収に来た宿の男性が礼儀正しく腰を折りながらこちらが差し出した食器を受け取る。

同時に、さりげなく伸ばされた手に握られた紙が僕に渡された。

静かに出入り口の戸を閉めながらまた腰を折る男性。その姿は宿に訪れた人間に対する礼儀以上の意味合いが込められていて、わずかに動いた口元が無言でその必死さを訴えかけていた。

戸が完全に閉まる。

男性の歩き去っていく音、戸の向こうに意識を向けながらそれ以外の不自然な物音や気配が無いことを確認する。

しばらくそのまま集中していたが、特に妙なものを感じることは無く意識を戻す。

「うまくいったみたいだな。手に入ったよ」

振り向き、僕が発した言葉に安堵の息をはいたのはウエンディちゃんだった。

食事をしていたときも気が気ではない様子だったし、今もシャルをぎゅっと抱きしめていた。

「よかった……」

「ああ、とはいえこれはまだ第一段階に過ぎない」

いうと、ウエンディちゃんは一転。安心した顔を真剣なものへと変える。

先ほどまで宿の食事が並んでいた場所に広げたのは今あの男性が持ってきてくれた紙、ササナキ近辺の森の簡易地図だ。

流石に手のひらに隠せる程度の大きさなので小さく見づらい。それに急遽作ってもらうことを頼んだため距離や目印のありかなどそれほどうっかりしたものではないだろう。

それでも、ゼロから探すよりはずっと楽なはずだ。

「さて、じゃあ昨晚の話を整理しよう。ウエンディちゃん、もう一度話してもらってもいいかな。ここササナキの住民を脅し、収入を奪い取ってるっていう闇ギルドの話」

昨日から感じていた住民のやつれ方と妙な視線の正体、闇ギルドの存在を。

この情報を持ってきたのは、予想外なことにウエンディちゃんだった。それも、温泉からの帰りに、である。

経験の無い温泉というものに好奇心を刺激され僕はそれなりに長

い時間昨晚の温泉を楽しんでいた。それこそ川の水で濡らしたタオルで済ませていた日もあったというのに昨晚ほど入浴していたのは記憶の中では初めてのことだった。人もまばらであり、中には一人で足を伸ばせる湯船もあったので僕ともあろうものが目的を一瞬忘れ満喫してしまったのだ。

妙な視線や雰囲気のことを思い出す頃には一時間がたっていた。とはいえ、女湯で騒ぎがあった様子もなかったしシャルルの存在があったとはいえあからさまなことはしていない、そんな状況でまさか宿にいる僕らを探して何かされることは無いと思っていた。

だが風呂上りに牛乳を三本買ったりしながらのんびり部屋に戻った僕を出迎えたのは、ただならぬ様子のウエンディちゃんと苛立ったシャルルだった。

何かあったにしては特に荒らされた様子も無く、長風呂過ぎて緊張感が足りないと思われたのだろうか。

そんなアホなことを考えた僕に、ウエンディちゃんはここに闇ギルドがいると言い放ったのだ。

それも、

「闇ギルド（バベット）「黒い操り人形」、か。そっち方面にも手を出してた僕が聞いたこと無いギルドということは、それほど大きな力を持ってないギルドだと思うんだが……」

「でもその人たちが噂の元凶……雪の魔法を使うドラゴンを操ってここの人たちを脅してるみたいですよ」

ドラゴンの噂の出所のおまけ付きで。

「町のいたるところに監視ラクリマ、数人のギルドメンバーが交代

で見張りをしている。だから監視の少ない温泉……特に少ない女湯露天風呂でその人がウェンディちゃんを見つけたのは幸運だったな」

「はい、最初は魔導師ってことがばれて何かされるんじゃないかって思ったんですけど……」

なんでも昨晚ウェンディちゃんが入浴していたとき、人が一人もいなかったのだという。

それで油断してギルドマークを隠さずにいたところ、魔導師ではないかと後から入ってきた女性に聞かれ、危うく敵だと断定し僕を呼ぼうとしたらしい。だが彼女は敵などではなく、ここササナキの住人であり魔導師であるウェンディちゃんに助けを求め、ウェンディちゃんの情報は彼女から得たものだった。

ちなみに町を裏から占領するようなギルドでありながら何故女湯に監視のラクリマが設置され盗撮に利用されていなかったかということ、万が一ばれた場合ここから得られるせっかくの利益を棒に振ることになるからだろう。それに温泉という密室や湯船の湯気はラクリマでの監視に不向き。

故に普段なら監視の人間がいるらしいが、人が皆無の時間だっただけに必要な情報をやり取りする時間はあったらしい。

魔導師であることがばれていれば警戒し最初から監視の人間がいただろうし、やはり隠していたのは正解だったということだ。

「闇ギルドが現れたのは半年くらい前だって言うてました。最初はすぐに評議員の検束魔導士に連絡を取ろうとしたみたいですけど、連絡したらそのドラゴンを使って温泉の沸いている場所を凍らしてササナキの住人を喰わせるって脅されてできなかつたみたいです」

「で、手早く監視の人間・ラクリマを町に設置して八方塞がりにした、と」

「魔法で凍らされても後で溶かせばいいじゃない、多少危険でも無理やり連絡しようって人はいなかったの？」

「……ドラゴンの魔法で凍らされた物は二度と溶けない、そういわれたんだって」

監視されている、とはいえそれは闇ギルドの連中が行うような付け焼刃の穴だけのものだ。現にこうしてウエンディちゃんという魔導師に助けを求め、僕が事情を知れている。

それでもこの問題が未だに解決していないのは、かの雪の魔法を使うドラゴンの存在があったからだった。

永遠に溶けない氷を生み出すような強力な力を持つ竜という存在が、闇ギルドというならず者に大きな力を与えている。

「ここには魔法を使える人がいないし、魔導師が来ることも少ないそうです。だから本当かどうかもわからない、けど闇ギルドが操るドラゴンは町長さんが実際に自分の目で見たらしくて……」

「でもあんまりモンスターに詳しくは無かって話だったよな」

「はい。小型のモンスターも滅多に見かけないそうですし、ましてやワイバーンも見たことがないそうです。だからとんでもない大きさの羽をもった生き物というのは覚えてるそうですが、足の数までは見ている余裕が無かったって」

「ドラゴンとの見分け方は足の数……とはいえそれも必ずじゃないからなあ、形の違う固体もいる可能性がある」

姿が判明しているドラゴンがウエンディちゃんのグランディーネ

だけである以上、本当は足の数やら形だけでドラゴンと判別できる、  
というのも確証を得るには物足りない。

ドラゴンを操る力を持っているにしてはササナキのような小さな  
町を占領していることに違和感がなくもないが、ドラゴンを見つけ  
操る方法を見つけたばかりで手始めにこの利益で収入を得て山の  
中で実験している可能性もある。

「まあ、本当にそれがドラゴンで闇ギルドに従ってるんだとしたら  
一番問題なのは話を聞けるか否かより……僕が生きて帰れるか、っ  
てことだよな」

「……………」

云うと、ウエンディちゃんが泣きそうな顔になり、シャルルが責  
めるような視線を向けてくる。

ウエンディちゃんに助けを求めた女性。それはつまり闇ギルドの  
討伐、ドラゴンの討伐をお願いしたいということだ。

通常のギルドだったらSランククエストに該当するような依頼、  
とてもじゃないがウエンディちゃんの手には負えるようなものではな  
く、女性はもともとウエンディちゃんを通じて所属するギルドに依  
頼を届けてほしいとのことだったらしい。

今の会話でもともとこの住人が評議員に連絡を取ろうとしてい  
た、という話題が出たが、評議員には魔導師がいるにはいるがあく  
まで犯罪者を捕まえることが仕事である彼らはそこまでモンスター  
討伐系の任務を請け負うことはない。対人用の魔法とモンスター用  
の魔法では用途が大分違うのだ。

モンスター討伐の任務は戦闘系の魔導師ギルドに依頼するのが基  
本とされている。

だが評議員とくらべ連絡手段の限られている魔導師ギルドにこんな山奥から監視されながら依頼を届けることは難しい。

だから、たとえウェンディちゃんのような子供だとしても、そしてその所属するギルドが戦闘ギルドという確証がなかったとしても、わらにもすがるような思いで依頼したのだろう。

そして、そんな必死な様子の女性にウェンディちゃんは思わず依頼を請け負うと、解決してみせると約束してしまったらしい。先ほどの地図も、昨晩明日の朝食ではれないようにもって行くと約束したものだった。

ケット・シェルトー  
化猫の宿は生産系ギルドである。補助系の魔法や戦闘後に使う治療の魔法ならばともかく、戦闘系の魔法を使えるものはいない。いるのは僕という先日加入したばかりの新人だけだ。

つまり、戦闘系の依頼を請け負った現状解決できるとしたら僕だけということになる。

「ごめんなさいクライスさん……。私、気持ちが舞い上がってました。こんな風に噂を追って遠くまで来て、あんなふうに誰かに必死にお願いされるなんて始めての経験だったんです」

「……その気持ちはわからなくも無い。君の身に降りかかる危険や戦闘を回避し請け負うのが役目って言ったのは僕だし、初めてばかりで興奮したのもわかる。とはいえ、闇ギルドだけでなくドラゴンに敵対されるとなると僕でも命の危険がある」

「……ごめんなさい」

「ちょっとクライス！ この子だって悪気があったわけじゃない、そんなに責めないで」

「あったら困る、命に関わるんだ。衝動で毎回危険な任務を持ってこられたらたまったもんじゃない」

命に関わる。その言葉は一週間前ウォードッグに喰い殺されそうになった二人にしてみればそれがどんなに恐ろしいものか予想が付かないことはないだろう。

一時の気の迷いと勢いに任せて身の丈にあわないことをしてしま  
うのは、子供とはいえ、子供だからこそ危険なことだ。

悪気が無いのも、激しく後悔しているのも理解している。

実を言えば僕は自分の力に自信を持っているし、いざとなったら  
切り札もある。もし相手がドラゴンだったとしても命を奪われるま  
ではいけないだろう。だからといって今回何も言わず解決できた  
として。ウェンディちゃんはさらに僕を信用し無茶な依頼を衝動で受  
けるかもしれない。

信用は嬉しいし、頼ってほしいとは思う。だが今後もこの少女と  
共に行動し、ドラゴンの噂という何があるかわからないものに飛び  
込んでいくのだとしたら衝動的行動を控えてもらうために多少後悔  
してもらう必要がある。

……と、いう考えから多少きついことを云ったのだが。

「…………ごめんなさい」

うっ……。

今にも泣きそうな声で謝罪している姿は、少々言いすぎた感が否  
めない。子供に対して命がどうか責めるような、生々しく惨い言  
葉を使うのはやりすぎだったかもしれない。

子供の相手など昔護衛で馬車の中の子供たちに旅の話を使い聞か  
せたくらいだ。叱る、などという経験は無いからどのくらいが適切  
なのか。

今言った言葉は事実だ。信用はされても行き過ぎた過信は危険だ。僕とて無敵超人ではない。

とはいえ、このままというわけにもいかないか。

「確かに命に関わるのはわかってるわよ、でも……」

「あー、いや。シャルルの言うとおりだ、僕こそごめん。言い過ぎた」

「……ううん。クライスさんは間違ってます、私が勝手に受けたことでクライスさんが命の危険に晒されるなんて考えてなかったんですから」

「うん、そうやって後悔してくれてるだけで十分だよ。今後一緒にドラゴンの噂を追うんだ、まあ今回みたいな場合は仕方ないけど今度から何かあったときは僕にちゃんと相談してほしい。君は僕の希望をくれた恩人だ、そんな君の願いなら僕はできる限りかなえるつもりだから」

「許して、くれるんですか？ 私、クライスさんのことも考えずに勝手な事したのに」

「許すもなにも、別に怒ってるわけじゃない。さっきは命がどうか大げさに言ったけど、あくまでそれくらい危険なこともあるから気をつけてほしい、ってだけ。ウェンディちゃんのしたことは間違ってる、困ってる人を助けようと思う気持ちはすばらしいものだ」

「……はい！ ありがとうございます」

ウェンディちゃんが泣きそうな顔から明るい顔に戻る。

この子は子供らしい衝動的な一面はあるものの、こうして自分のした事をちゃんと後悔できるしっかりしたい子だ。同じ過ちを繰り返すことは無いだろう。

シャルルも僕の言いたいことは理解してくれたのだろう、しぶしぶといった様子でうなずいている。

「さて、話を戻そう。ドラゴンの相手と闇ギルドの相手、同時はきついで言ったが……そのドラゴン、闇ギルド全体じゃなく個人が操ってる可能性もあるって話だよな」

「あ、はい。町長さんが会った時、闇ギルドのマスターみたいな男の人がドラゴンにじゃなくて、その近くにいた女の子に命令してるように見えたらしいです」

「でも、個人がドラゴンを操るなんて可能なの？ 洗脳系の魔法は禁止されてる魔法だから詳しくないけど……」

「僕もそうだ。でも、難しいはずだ。そして難しいなら別の可能性が出てくる」

こくり、と二人が頷く。

僕が命の危険が冗談だといえるもう一つの理由、ドラゴンを操る少女の存在。

あくまで仮説とはいえ、ドラゴンが一回の闇ギルドに操られている可能性と比べれば大分現実的なものはずだ。

「もしそれが見間違いじゃないとしたら、その女の子がドラゴンスレイヤーかもしれない」

「そうね。ドラゴンスレイヤーなんていってもあんたみたいに戦闘特化じゃないウェンディみたいな子もいるんだもの」

「ドラゴンは操れなくても、娘みたいな存在である人間の女のこの方を操っているかもしれない、って事ですね」

これは昨晚も話したことだ。ドラゴンに云うことを聞かせられる存在がいるとすれば、それはドラゴンスレイヤーである可能性が高い。

ドラゴンが操られていないのなら、操られているにせよ自分の意思にせよ、人間のほうに付け入る隙はあるだろう。

「容姿は白い長髪、白いぼろぼろのワンピース、ウェンディより少し年上くらい。特徴としては十分だな」

「ドラゴンと同じ色をしていたから覚えやすかったそうです。後、少し片言っぽかったとも言っていました」

「片言、ね。ドラゴンに育てられた僕らがこうして普通に話せてる以上少し不安になる点だが……」

ウェンディちゃん曰くドラゴンは人間の一般常識から言語まであらゆることをしっかり教えてくれたらしい。記憶を失っているとはいえ、僕も常識や言語はしっかりと刻まれていた。

知識が少なく身内を洗脳されるような力の弱いドラゴンなのか、それとも全部勘違いでドラゴンですらないのか。

一番好ましいのは僕らの親代わりであるドラゴンの行方不明に詳しく話を聞かせてもらえることではあるが、贅沢は言わない。危険を冒す以上話ができなくても何も知らなくても前者、ドラゴンであることを願いたい。その存在を目にすることさえできればまた一つ希望が生まれるのだから。

「とりあえずその子を優先的に発見して無力化することを第一目標にするとして。地図に明記されているのは奪っている利益の受け取り場所、根城と受け取り場所は流石に分けているだろうし結構広範

困を探すことになりそうだ」

「そうですか……じゃあ、やっぱり私たちはここに残ったほうがいいですか？」

「……いや、できれば一緒に動いてもらいたい」

『え？』

広範囲を動き回って敵を探す、それに自分では足手まといになるとおいていかれると思ったのだろうか、二人が意外そうな顔をする。僕自身、最初は二人にはここに残っていてもらおうと考えていた。まだ二人には見せたことがないが、僕の身体能力は滅竜魔導師としての魔法を使うことで人間の限界を遥かに超えることも可能になる。ウォードッグとの戦闘で見せた肉体硬化、膂力上昇などほんの一部だ。

使いようによっては丸一日全力で走り続けることも可能な僕に、同じ滅竜魔導師とはいえ補助系に特化したウェンディちゃんや飛べるだけであるシャルルが付いてこれるわけがない。それに、ウェンディちゃんは軽傷とはいえ足を怪我しているためそれを庇う必要も出てくる。当然ついてくることなどできない。

「で、でも私……それにシャルルも戦うことは全然できませんし、付いていっても邪魔しちゃうんじゃない……」

「まあね」

「ちょっと！」

「ごめんごめん。でも、だからこそここに残していつて何かあったら対処できないだろ？」

昨晚、誰かがこの部屋に来ることは無かった。だからといって今

日も何も無いとは限らない。

僕の役目が脅威から彼女たちを守ることである以上、二人との別行動はできるだけ避けたいのだ。

「だからって……クライス、あなたこの子を闇ギルドとの戦いに巻き込むつもり？」

「そんなことはしないさ。見つかるつもりは無いから戦闘になる場合はこちらから仕掛けるときだし、僕が派手に動いて安全なところにいてもらうよ」

「……それでもウエンディに危険が及ばない確証はないけど、ここにいるよりはあんたの近くのがましかしらね」

「だろ。ウエンディちゃんはどう？ 正直ドラゴンとの戦闘になる可能性もある、君の補助魔法を当てにさせてもらう場合もあるかもしれない」

「……………」

少しずるい言い方をしたかもしれない。

ドラゴンの情報を求めてきた以上、遅かれ早かれこの事態に巻き込まれていただろうが今回の場合はウエンディちゃんが原因といってもいい。

そんな負い目に付け込むような言い方はあまりいい方法とはいえないが、見るからに戦闘自体嫌いであろうこの子連れ出すにはこれしかない。残していくのは危険すぎる。

それに、ドラゴンとの戦闘でこの子の補助魔法が必要になるかもしれない、それは事実だ。滅竜魔法、そう銘打たれた魔法の使い手である僕たちだが、実戦経験などあるはずも無いのだから。

「……わかりました。クライスさんの迷惑にならないように、がんばります！」

小さく震えながらではあったが、はっきりと僕の目を見ながら言ってくれた。

ごめんね、と心の中で謝っておく。

だが今回のことはお互いの教訓としてしっかり刻まれたはずだ。

「よし、よく決意してくれた。そうと決まればすぐ行動だ、行こう」

・  
・  
・

ササナキ周辺の森は、背の高い常緑樹によって囲まれており幸いなことに身を隠す場所には困らない地形をしていた。昨晚からずっと曇天の空も、影ができ辛く日中行動する上で助けとなっている。

そんな森の中を、僕は疾走していた。

木から木へ、できるだけ葉を落さず、枝を揺らさないように静かに。だがすばやく走り抜ける。

これだけ多くの木が並ぶ森の中、荒い大地を走るよりはずっと効率的だ。

こんな風に走り出してからどれくらい時間がたっただろうか、実際はそれほど経っていないのだろうが様々な要因からくる緊張が僕の思考を加速させている。

まずはドラゴンの正体だ。思っていた以上に危険な状況に陥ってしまったが、だからこそ期待だけが高まる。可能性は低い、そうわ

かかっていてもいることを前提に思考してしまうこともしばしば。早く真相を確かめてみたい、行動に制限が付く前は感じなかった興奮と焦燥が混ざったような感覚だ。

次にササナキのこと。宿を出る際、一応依頼のため行動を始めるという節のメッセージを渡し、泊まっていた部屋の窓から直接飛び出してきた。まだ僕たちが宿の中にいるよう見せかける目的でそうしたのだが、監視ラクリマに引っかけたあたりはしなかっただろうか。魔力を使う監視ラクリマ、その大まかな位置はよむことができたので避けてきたつもりだが、その分野に特化しているわけでもないので確実とはいえない。

幸いなのは森の中に監視ラクリマが無いこと。闇ギルドの實力は未知数だが、ドラゴンに過信し町の外にはそこまで警戒していないといったところか。

そして最後に、

「ちょっと早すぎないかしら！　ぶつかったりしたらどうするのよ！」  
「シャルル、心配しすぎだよ」  
「ウエンディちゃんの言うとおり、心配しすぎだ。僕がそんなへまするわけないって」

小さな声で叫ぶ、という器用なことをしているシャルル、そしてそれに答えるウエンディちゃん。この二人の存在である。

二人は僕のスピードについてこれるはずが無い、ならばどうするか。簡単なこと、僕が二人を背負って一緒に移動すればいいだけの話だ。速度は多少落ちるとはいえ、子供と猫を背負って移動するくらいどうってことない。

とはいえ、体の頑丈さがまるで違う僕と彼女たち。ぶつけるわけ

無い、口ではそういっても気を使って走ることは避けられないのだ。

「ならいいけど。それにしても、あんた滅竜魔法以外にもいろいろ使えたのね」

シャルルが言ったのは、先ほど僕が行動するに当たって武装を取り出したことを言っているのだろう。

現在の僕の武装は、この二人と出会ったときと同じ和服の上に笠と羽織、そして身刀を刀身に用いた刀というもの。単に噂を追ってきただけの昨日は、どれも装備していなかった。

ならばどこから取り出したのかというと、滅竜魔法ではない魔法【換装】を使い、異空間に入れておいたのを取り出したのだ。

「魔法空間に入れたものを自由に取り出せる魔法ですっけ？ 複数の魔法使えるなんて始めて聞いたわよ」

「使えるって云ったって付け焼刃だよ。劣化してて戦闘中に出し入れするなんて器用なことはいできないし、そんなに多くのものをしまったりもできない」

「でも、付け焼刃で魔法が使えるなんてすごいですね。このマントと帽子もクライスさんの魔法ですか？」

「これは違うよ。これ自体に魔法が付与エンチャントされてる魔法道具」

マントー正確には打裂羽織ぶつれはやおしといって帯刀しやすいよう工夫されたいわば東方版のマントであり、帽子といわれたのは三度笠みどがさというもので、塵や風から顔を守ってくれるこれまた東方のものだ。

これは旅の道中手に入れたものだが、ただの羽織と笠ではない。木々の境、数メートルほどしかない小川の上を飛び越える。通り

過ぎる刹那はっきりと写るはずの僕たちの姿は、しかし歪んだように霧がかかり一見崩れた波紋のように見えた。

それは普段は漆黒のこの羽織と笠、魔法道具「黒霧」の透明化能力によるものだ。

まあ透明化などと銘打たれた能力ではあるが、実のところ辺りの風景を反射し投影してるだけなので突っ立っていけば違和感ばりばりだし、動いていても先ほど小川に写ったように空間が揺れているような奇妙な跡は残ってしまう。

それでも遠目に見る分には十分な効果を発揮し、討伐系の依頼の際には重宝しているしろものだ。

「というか二人とも、案の定索敵に時間がかかるとはいえもう少し雑談を控えること」

はっ、として黙ってうなづく二人。僕自身二人の質問に答えておきながらいまさらな気もしたが。

恐怖も緊張もあるだろう、だが時間というものはそれらを奪っていく。

それほど時間がたっていない。それは僕個人の感覚であり、実際はすでに一時間近く経過している。

最初は大人しかった二人が、さっきのようにどうでもいい話題を振ってきたのは動かない状況を紛らわすため。どこにいるかもわからない敵を探す、そんな経験が無いであろう二人に何時間も緊張感をもち警戒を怠るな、などと野暮なことを言うつもりはない。背負われているとはいえ、できる限り衝撃が少ないように走っているとはいえ、流石に疲れもあるだろう。

宿に戻る……のは出入りに問題があるから却下。その辺りの目立

ちにくそうな木の陰でしばらく休憩したほうがいいかもしれない。

「……………」

そう提案しようとした瞬間、今までと違った違和感を感じ一時間ぶりに足を止めた。

怪訝そうな雰囲気背後から伝わってくる中、なにかが正面に来るように体の向きを変えじっとそちらを見据える。

「……二人とも、雑談を控えろって言った瞬間にあれだが、向こうから何か感じないか」

「なにか、ですか？ ……私は、なにも」

「私も何も感じないわね。あなたには見えてるわけ？」

「見えるというよりは感じる、だな。近づいてみよう」

再び枝を蹴り、移動を開始する。

数百メートルも進んだ頃だろうか、ドラゴンスレイヤーとして感覚が優れているウエンディちゃん、続いてシャルルもその変化を明瞭に感じたらしく、薄れていた緊張を取り戻し始めていた。

違和感の正体は冷氣、一方向から不自然な冷たい空気が漂ってきていたのだ。

まだ寒さを感じる時期にしては早すぎるし、突然限定的な方向からだけというのも不自然だ。

ならば思い当たるのは、雪の魔法を使うという竜の話。ここ一時間走り回ったかいたったというものだ。

「あっ……………！」

僕の足が止まるのと、背後でウエンディちゃんが声をあげるのは同時だった。

「ウエンディちゃんも見えたか」

「……はい」

「なに？ どうしたのよあんなたち」

一人見えていないらしいシャルルに手で静かにするよう促し僕――それと同じく見えているらしいウエンディちゃん――は先にあるものを見据える。三百メートルほど先、少しだけ開けた場所にある湖のような場所。そこにいる、真っ白な少女の姿を。

白いワンピースに白い髪、十五歳くらいの少女。ウエンディちゃんが持ってきた情報どおりの姿だ。

ササナキから離れたこのあたりの地面は相応に荒れていて、子供が一人で来るには違和感があり過ぎるし、あんな年頃で白髪を持つ人物などそうはいない。間違いなくドラゴンの横にいたという少女だろう。

そして、なにより……

「おいおい、あの四足の白いやつ……まさか本当にドラゴンだって言うのか……」

「クライスさんにもそう見えますか？ 私の見間違いなんかじゃないですよね!？」

興奮からか、大き目の声で聞いてくるウエンディちゃんを咎める余裕は僕にも無かった。

ワイバーンなどとは比べ物にならない巨大な体躯、折りたたんで  
いるがそれでも広げれば天を覆いつくせるであろう白銀の翼、そし  
て辺りの木々より太い四つの足。

紛れも無い、僕たちの想像するドラゴンそのものの姿だった。

噂は本当だった。紛れも無い、僕が捜し求めた竜と言う存在が白  
い少女に付き添うようにたたずんでいる。

ようやくだ……。

「はっ」

「……クライスさん？」

ようやく、見つけた！

「二人とも、これを被ってここでまってる」

「え……わっ!？」 「ちょ……いきなりなにをっ」

枝の上では流石に危険だろう、多少荒いとはいえ大地に降り立ち  
二人を下ろし黒霧を放る。

腰の刀を帯から抜き取る。

居合い加速用の魔道炸裂弾の装填されたマガジンを数個魔法空間  
からとりだし、一つを取り付ける。

姿勢を低く。

背後の少女たちのことなど、すでに意識の外。木々など眼中に無  
い、見据えるのは白いドラゴンまでの最短ルート……白い少女が視  
線と一直線になるように調整する。

狙うのは一撃必殺。

さっさとあのガキを無力化して、ドラゴンから話を……僕の記憶

の手がかりを！

「フー……」

深く息を吐き、脱力。左手の人差し指を――引き金トリガーへ乗せ、引く。

炸裂した魔道弾により鞘に付けられた打鉄が刀の鏢つばを高速で打ち出す。「爆刀ばつとう」となずけた奥の手の一つが、刃の滅竜魔導師である僕の魔力と筋力そして魔道炸裂弾の爆発による音速を越える超高速抜刀が、眼前の木々をなぎ払う。

一回目の居合いが終わり刀を鞘に戻した頃、ようやく竜がこちらに気づいた。

だが、遅い。

滅竜魔法「紋床もんしよつ」。ま薄く圧縮した魔力の足場を空間に固定・炸裂させ、一歩で距離を詰める。

二回目の居合い。

流石に殺してしまっっては話どころではなくなくなってしまふ、今度はただの居合い。少女の腹を柄頭つかがしらで叩き意識を奪う。

「な……」

漆黒の柄が少女の腹に叩き込まれるはずだったが、何かに阻まれそれは失敗に終わった。

一瞬だけ視線をそちらにやれば、柄と少女の腹の隙間の空間に割れたガラスのような亀裂がはしっている。

防御魔法……？ いや、違う。

これは、

「氷か！ くそっ！」

亀裂の入った空間の正体、魔力で強化された氷の壁に驚愕する暇も無く竜の尾が頭上から降ってくる。

大質量を誇るそれを傾けた刀で受け流しながら後方へ飛ぶ。森に耳障りな音が反響し、それにふさわしい衝撃が受け止めた刀を伝わり僕の腕に残る。

少し受け止める角度を間違えたか……無視できるレベルだが痛みが残ってるな。

だが、それでいい。竜の一撃としては少々物足りないが、この程度ではないことを予感させてくれる。

「……………！」

少女が聞いたことの無い言葉を静かに、しかし荒々しく竜へと投げける。

怯えた様子は無い。いきなり襲われたにしてはやけに理性だ……やはり操られているのはこの少女のほうか。

鞘を腰帯に刺しなおし、刀を抜く。

気づかれる前にやれなかった以上、あの巨体と戦うしかない。居合いは不向きだ。

「……………！」

少女が僕を指差すと同時、竜が息を吸う。ブレスか、いいだろう。刃に魔力を流す。

ぼんやりと血の様に赤い魔力を帯びた刃。

冷気が迫る。

笑みは崩さず、僕は刀を振り下ろした。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~10005](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~10005)

---

黒き刃は妖精と共に

2015年09月12日 18時09分発行